
裏表の未来予想図

四方祐樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏表の未来予想図

【Nコード】

N6265B

【作者名】

四方祐樹

【あらすじ】

高校に入学したばかりの少年・上岡岳。しかし届いたメールと入学早々起こった事故が、彼の運命を大きく変えてしまった。第1回小学館ライトノベル大賞ルルル文庫部門投稿作（選外）

序章 月明かりの中で（前書き）

この話は第一回小学館ライトノベル大賞ルルル文庫部門に投稿した作品に加筆修正を施したものです。

また突然死神にされてしまった少年の恋愛話を描いていますので、死に嫌悪感を感じる方はご注意ください。

序章 月明かりの中で

消毒液の独特なにおいが、病室を包み込んでいた。

深まった夜闇の中、窓の外からは淡い光が射し込んでいる。

金色に輝く、小さくも無数の星明かり。

蒼いぼんやりとした、孤独な月明かり。

まるで東京の空じゃないみたいだ。

こんなに綺麗な夜景、ここでは見たことがない。

どこか田舎の景色のようだった。

それに、風はやんでいた。

窓の外で木々は、その身体を存分に休ませている。

大地と一体化してしまっただのか、動く気配などまったくない。

止まる時間に、身を任せるがままに。

木の葉も規則的な呼吸を繰り返していた。

遠くを見やれば、ブレーキランプの赤い列がイルミネーションの

ように道に並んでいる。

だがそれは、どこか異世界の出来事のようにだった。

いつもは五月蠅い通りの喧騒は、どこに消えてしまったんだろう。

唸り声をあげる車やバイクのエンジン音も、何も聞こえてはこない。

ただ、そこは静寂に包み込まれていた。

外はあまりにも、穏やかすぎていたのだ。

視線を手前に戻す。

柚莉は岳たけを前にして、どこまでも健やかな寝息をたてていた。

岳にはそんな柚莉の存在が、あまりにもいとおしかった。

ずっと柚莉と共にありたい。

そう願っていた。

それが唯一の願いだった。

でも岳は、この場にはあまりにも似合いすぎる服を、その身に纏っていた。

たとえそれが、彼の願わなかった形であろうとも。
現と共にあり続ける事実、どこまでも残酷極まりない。
そして岳には、それを覆すような術など持ちえてはいなかったのだ。

「岳。そろそろ時間だ」

耳から入ってきた言の葉は、そのまま直に心にまで届いた。
それは決して、暖かなものではなかった。

心臓の下の辺りから、鈍器で叩かれたみたいにじわりと鈍い痛みが広がってくるのだ。

呼吸もできないほど苦しく。

目を瞑りたいほど辛いくらいに――

隣には岳と同じ格好をした拓也たくやが立っている。

だがそれさえも、岳は直視することすらできやしない。

それが罪の形だからか、それとも……。

強く握った掌は、爪が食い込んで白くなっていた。

ただ己の無力さを噛み締めながら。

その場に立ち尽くすことしか、岳にはできなかった。

過去も運命も、変えようのないことだ。

解りきっているさ、そんなこと。

でもそれが、容赦なく岳にのしかかっていたのだ。

（ごめん、柚莉。本当に――ごめん）

こんな自分のせいで。

こんな過去のせいで。

こんな運命のせいで。

柚莉のたった一度きりの人生が、台無しになってしまっただなんて。
許せなかった。

だが、それは何に対して――？

憤りと悲しみに暮れる心の底で。

行き場のない感情が、行き詰っていた。
苦しかった。

ただ単に、苦しかった。

「……ちくしょう……っ!!」

掴んだロープの裾が、はらりと揺れる。

それは闇と見間違ふほど、漆黒に染め上げられていた。

そして岳の背後では。

鈍色に輝く大きな鎌が、ぬらりと月明かりに照らされて、光っていた。

章幕 消え去った記憶の中

「ふふふふ……」

時は夕と夜の狭間。

天空は見渡すかぎり、夕の茜と夜のダークブルーとが混ざり合い
ぶちまけられている。

そこは不気味な空気に包み込まれていた。

「ふふふつ……ふふふふ……」

遠く聞こえるは、不気味な微笑。

風に乗っては夜色をした羽が、軽やかに宙を舞っていた。
はらはらりと、地に近づいていつて。

……と。

突如、爆音がいたる所で巻き起こったのだ。

鼓膜を突き破り、直接脳髄に響いてくるほどの爆音が。

街全体を煽った。

不気味な空は、大量の黒煙に覆い尽くされた。

人々は押し合い引き合い、転びそうになりながらも。

一目散に郊外へと逃げようとする。

どこかで子供の泣き声がした。

刹那、街の中央に高々と聳え立っていた時計台が、姿を消したの
だ。

地が割れるようで、しかし脆くも儚い音をたてながら。

粉塵を巻き上げて消えていった。

下にいた幾人ものが、哀れにも潰される。

悲鳴がさらに響き渡った。

「あはははははは——！！」

もんもんと立ち込める粉塵。

辺りは薄茶に染め上げられ、他には何も見えなかった。

崩れ去った時計台の粉塵が徐々に晴れていく。

薄ぼんやりと見える、時計台だったモノ。

その脇にある建物の屋上には、高々と笑い声をあげる影があった。陰には、巨大な双翼が付いている。

——天使。

脳裏によぎるは、美しい単語^{モノ}。

しかしそれとは相反する存在。

異なる風貌。

——墮天使。

街はさらに破壊されていく。

破壊音は天を裂き、爆風は空を押し上げた。

逃げ惑う人々は枯葉のように容易く飛ばされていく。

墮天使はその光景を、爛々と好奇心に満たされた双眸で見ている。だがその顔に浮かんでいるのは、氷のごとく冷酷な微笑。

墮天使は鼻で一つ、笑った。

「この期に及んでなお逃げ惑うとは、何と愚かな奴等だ。……このアレクトスが来たからには、助からないと知っておいてなあ」

一歩足を踏み出すと、アレクトスは建物から飛び降りた。

漆黒の羽が舞い散る中、ストーンと軽い音をたてて着地する。

湧き上がる数多の悲鳴。

空気が震えた。

逃げ惑う街の人々。

あまりの恐怖に腰を抜かした者とアレクトスとの視線が、皮肉にも合ってしまった。

アレクトスはその者に向かって、口の端をゆくりと、上げた。

「今までの小細工にはけりをつけてやる。——さあ見るがいい。この街にとっての、最後の晩餐をな」

彼は両の手を大仰に広げ。

その歌声は、どこまでも響き渡っていった。

一章 日常との交差点

この春めでたく、上岡岳^{かみおかたけ}は高校生の仲間入りをした。

制服はグレーの学ランで、それほど回数を重ねていないためか、糊がきいてぴんとしていた。着こなしだつて、先輩たちと比べれば初々しさも然ることながら、ただその存在だけでも新一年生だと一目瞭然である。

例えば校則に沿った制服のきつちり具合だとか。

例えば持ち慣れてないケータイ電話だとか。

例えばその顔に浮かぶ不安と期待の色合いだとか。

「んじゃ、部活に行つてくるから」

入学してから最初の日曜日。

期待に胸を躍らせながら、岳は外へと飛び出していった。

1

岳には秘密と言えるものがあつた。

みんなも持っているような小さいものは、いっぱいはいあるけど、本当はどれもこれも、秘密が解らないようなどうでもいいこと。

ただその中でも、大きなものはふたつつあつた。

一つは将来の夢が明確に決まつたこと。

もう一つは、岳にメル友ができたということだ。

入学式を数日後に控えた、ある日のことだつた。

その日は特に何があつたというわけでもない。

マンションの隣部屋に住んでいる、幼馴染で従兄弟の竹原勇一^{たけはらゆういち}と、いつもみたいにふざけ半分に話をして。その後はぼんやりと外を見

てみたり、はたまた寝てみたり。

いつもと何一つとして変わらない。そんな日だったんだ。あの時までは。

天高くに昇る太陽が、光を存分に地上へと降り注いでいて。代わり映えも何もない、穏やかな昼下がりだった。

遊び疲れたためか睡魔に襲われた岳は、これぞ春休みの特権だと言わんばかりに、青い空が広がる下、ぐっすりと眠りについていた。だがそんな岳の安眠も、カタカタと聞こえるバイブ音に破られてしまったのだった。

小さな呻き声が、岳の口から漏れる。

起きた時には、空の色は水色から茜へと、すっかり変わってしまった。

相も変わらずに五月蠅い、外界の喧騒。

眠気眼をこすりながら机の上を見やれば、ケータイがメール受信のランプをのんきにぺかぺかと放っていた。

誰が俺に何用だ？ と睡眠を邪魔されてか。いつもはメールが届くだけでも嬉しいはずなのに、岳は渋々とメールを確認しようとして。

しかし届いたメールは、岳の知っている誰からでもなかったのだ。多分。

というのも、送信者名がまったく解らないからだ。

無題のタイトル、知らないメールアドレス。

一体、誰からなんだよ……。

眉間に深い皺を刻ませながら、岳はケータイとにらめっこをして。慣れない手つきで本文を開いた。

………と、

『あなたには、大切なものがありますか？』

そこにはたったの一文しか、書いてなかったのだ。

岳の眠気もすっかり覚めてしまい、その目は再びケータイの画面へと釘付けになっていた。

いきなりなんだよ……。

というのが岳が送信者に持った、正直な第一印象だった。

まさか間違いメール？ と疑ってみたものの、岳のメールアドレスを登録している人でない限り、間違えようもないだろうし。それに誰かが教えたのだとしても、名前を書き忘れるなんてことはなからう。しかも投げかけが『あなた』だし。

でも確かにここには誰宛ても解らない、無名のメールが一通届いているわけであつて。少なくともそれは事実であるのだ。

しばらく岳は、バカみたいにケータイの画面とにらめっこを続けていた。

勿論、状況が変わるわけでもなければ、相手の名前が解るわけでもない。変わっていくのは時間だけなんだ。……知っている。

無情にも過ぎ去る時間の中。

眉間の皺は、深くなる一方で。

岳は生唾を一つ飲み込むと、おもむろにボタンを押し始めたのだつた。

『俺には大切なものはあるよ。

……ところで君は、何で俺なんかにメールを送ったの？

もしかして間違えていたとか？』

そこまで打ち込むと、岳の指は止まった。

何を律儀に返そうとしているのだろうと、今更ながら気付いたのだ。

別に知らない人からのだったなら、返さなくてもいいに決まっている。いや、むしろ返さないほうが、今のご時勢では安心だ。

それを知っているのに、何でわざわざ……？

律儀だといえば律儀だが、馬鹿といえばこれ以上ない馬鹿なわけ

で。

窓からは力をなくした陽光が射し込んでくる。

夕刻の暗い部屋の中で、ケータイの画面だけが浩々とした光を放っていた。

岳の顔は、発する白光に照らされている。外で何か、音が聞こえた。

……どうしよう。

「ゴルア、岳！　引きこもってないで、さっさと出て来いやあああああ！」

突如、鼓膜がはち切れんばかりの怒声が室内に響いた。

するとバンツ！　と、突拍子もなく扉が開け放たれたのだ。

ヒツ、と小さく悲鳴を漏らした岳は、背後に迫るただならぬ空気に怖気を覚え、機械的に首を後ろに回した。するとそこには姉である雪乃が、どす黒いオーラをぶちまけながら仁王立ちしているではないか。岳は思わず、もう一度引き攣った悲鳴を漏らしてしまった。手の中でケータイが踊った。

どこの家でも大抵はそうなのだろうが、長子で長女という者は、すごいのだ。いくら美人だろうが何だろうが、やることはいたって大胆不敵。ぶつちゃけ弟なんて、泣かせてなんぼなのだ。

勿論上岡家も例外ではない。もれなくついてくる最悪パターンの典型で。

「夕食当番サボって、ただで済むと思っているのか？　テメエ」

とか言いつつも、ちゃっかり雪乃は殴りかかる寸前。

言っていることとやっていることが、既にかみ合っていない。

腰の抜けかけた岳は、ゴキブリかと思間違うほどの速さで、フロリングの床を手足をバタつかせながら後退っていった。

そういうのは、脅して使う言葉だろう！！

「それとも。……一生引きこもりを体験させてやろうか、オイ」

「い、いいえ。滅相もございません！」

半泣き状態で、岳は首が飛んでいくんじゃない……。というくらいに、

今度はぶんぶんと首を振りたくった。

しかしそこで許してもらえないのが、世の中のいい所。
意外に神様も薄情者なのだ。

「男ならやるって言ったものくらい、受け取っとけよ！」

どこまでも冷酷女だ、こんちくしょう。

新体操部で日々鍛え上げられている雪乃の鉄拳が、岳の顔面目掛けて繰り出されたのだ。

(……っていうか、引きこもりじゃねえのかよ!!)

話がチガウじゃん！ と、岳は半ば自棄になって首を引っ込めた。
あの世に引きこもりはしたくないッ!!

——と。

ドゴン——!!

「……………チッ」

超絶破壊音が、岳の頭上すぐの所で聞こえてきたのだ。

喰らっていたら、…………絶対は今、この瞬間を生きちゃいない。
だが、それよりもだ。

(あ、あんの姉貴。マジで殺意満々じゃん!)

首を引っ込めていなかったら、確実に御陀仏だね。三途の川の向こうで、誰かが出迎えてくれたこと請け合い。

最後に聞こえた舌打ちが、最期にならなくてよかったよ、マジで。

「受けとれつつただろうが、岳！」

血の気の引けた岳とは正反対に、何でそんなに穏やかな笑みを浮かべられるんだよ。とか言いたくなってしまふ天使の微笑を、雪乃はその顔に浮かべていた。口調とまったく合っていないのが、本当に恐ろしいわコノヤロウ。

「何避けてんだよ！」

「避けるんに決まっているだろう！ 危うく選手生命どころか、命の灯火自体が消えかったわい！」

「お前の命の灯火が消えたところで、世界は何一つ変わらねえから

安心しとけ」

「だばらっしやい！」

こいつは悪魔だ。天使の面を被った悪魔だ！

ちよつと涙が零れちゃった瞳で雪乃を睨みつけながら、岳は精一杯の反抗を試みせた。

だが当たり前のごとく、それは通用しない。

たった二歳の差で、何でこんなにも上下関係が変わってきちゃうのだろうか……。

学生時代と親族関係での年の差が大きいとは、まさにこのことがもしれない。

そう考えると遅れて生まれてきたのが、なんかちよつと悲しいぞ。誰をも寄せ付けないどす黒オーラを、さらに放出し続けながら迫り来る雪乃の前に、岳は本気でそんなことを考えてしまった。

やっぱり前言撤回します。神様助けて下サイ。

「ほほーう」と言いながら、雪乃は迫ってくる。

再び繰り出すのか、指の関節をバキバキと鳴らしていた。

どこぞのヤクザも、軽くびびるような狂氣的な笑顔は、やっぱり満面だ。

岳が後退る中、ケータイ電話がコトンと落ちた。

雪乃は岳を前にして立ち止まった。

（殴られる——！！）

思わずギュッと目を瞑って、岳は大して意味がないだろうが顔面を腕で覆った。

しかし雪乃の興味は可哀想なことに、既に岳には向いていなかったのだ。

ひょいと軽快にしゃがむと、雪乃は岳の落したケータイを手に取っていたりする。

放たれている白光が、雪乃の顔を照らした。

「なーんだ。ケータイの使い方が解らないなら、最初っからそう言いなさいよ」

だがいまいち状況の掴めていない岳は、腕の間から恐る恐る雪乃を覗き見ていた。

「メールはねえ。ここ押して送るときやいいの」

ホラこれね。とか言いながら、雪乃は岳の前にケータイを掲げて、ピッピとボタンを押していく。

あまりにも態度がコロリと変わった雪乃に、岳は毎度ながら呆けてしまった。

それでも視線は、ケータイを弄くる雪乃の手元に釘付けで。

あー、やっぱり使い慣れてるな。姉貴。

……なんて感心しているのも束の間。岳は何か忘れていると、ふと思い出したのだ。

あれって、送っていいのか？

「な……っ！ ま、ちよつと待って！」

頭の中は既に真っ白だ。

ヤヴァイ。とんでもない人宛てだったら俺、また命の灯火消されかけるの！？

「は？」

だが時既に遅し。

無情にも突き出された画面には『メール送信中』の文字が、画像と共に映し出されていたのだった。

「……………」

嘲笑っているのかそうでないのか。そんなことは知らない。

ただ『メール送信中』という文字と共に踊っている、あの奇妙なキャラクターたちが、どうにもこうにも腹立たしくて。だからといって何かをすることさえもできやしなくって。怒りの捌け口がやっぱり解らなくって……。

バカみたいにあんぐりと口を開けた岳は、はらわたが煮えくり返るのと途端に冷めていくという、あまりにも貴重な体験をしてしまっただった。

どうしよう……。という言葉が別の意味で、再度岳の脳内を埋め

尽くした。

画面には白光と共に『送信完了』の文字が、映っていた。

再びケータイが揺れたのは、それから数分後のことだった。

岳は雪乃に脅されるがままにキッチンへと向かい、逆らえないのは承知済みなので、一切の抵抗もせず、夕飯の支度を始めていた。トントンと心地いいリズムをたてながら、岳は野菜を一口大に切っている。と、リビングにあるテーブルの上で、カタカタと何かが揺れる音がシンクロしてきたのだった。

（誰からだろう……？）

振り返ればケータイの着信ランプは、またもやぺかぺかとのんきに光を放っている。

岳はその手をいったん休めるとズボンで手を拭い。半ば予想立てをしながらも、のそのそとテーブルまで歩んでいった。ランプはまだ、光を放っている。岳はケータイに手を伸ばすと、眉間に皺を寄せつつ、途中何度か失敗をしながらもメール画面を開いた。メールアドレスは先ほどのものと同じようだが、今度はタイトルに『お返事ありがとうございます』と、書いてあった。

『すみません。でも、間違いじゃありません。』

風船に手紙をつけて飛ばすのとかありますよね？

あんな感じで、適当にメールアドレスを打ち込んで送ったので…

…。

いきなりのメールに驚かれたかもしれませんが。

けど、返信して下さってありがとうございます。

あなたには大切なものがあるんですね。

やっぱりいいですよ、大切なものって。

あるだけで力が漲りますよね。

実は私にもあるんです。大切なもの』

文面からは、その人のほのぼのとした温かさが感じられる。それに見た感じからして、どうも異性っぽい。

どうやら考えていたような人とは、一八〇度違ったようだ。どうしてだろう。

初めてなのに、会ったことさえないのに。自然と親近感が湧いてきた。

口元には柔らかな微笑が浮かんでいる。

岳は慣れない手つきでボタンを押し始めた。

この向こう側にいる人と、もう少し近づいてみたい――

『そうだね。大切なものって、あると意外に心が落ち着くし。あつて損することはないもんね。きっと。』

……あ。そういえば君の名前、聞いてなかったよね。

ごめん、こういうことにはめっぽう疎くつて。俺……。

ちなみに俺の名前は岳だよ。君の名前は？』

ボタンを押す指は、自然と軽かった。

さっきまでの不安なんて、まるで嘘のよう。心から軽くつて。

岳はすぐに打ち終わると、今度は何の躊躇いもなくメールを送った。

さっきは腹立たしく思ったあのキャラクターたちも、今はちょっとだけ可愛く見える。

――早く、返事が来ないだろうか？

手の中にすっぽりと納まるケータイを、岳はいとおしげに見つめた。

メールの送信を終え、ゆっくりとケータイをズボンのポケットに入れると、岳は腕捲りをしながら再びキッチンへと引き返していった。

早く作らないと、また殴られかねないからね。

彼女からの返事は、すぐに届いた。

名前はユリ。

同い年の女の子。

同じく東京都心部在住。

これほどまで上手い繋がりがあるだなんて、岳には想像さえしなかったことだった。

でも、確かにこれは事実であって、偽りじゃない。

どれだけ上手い話だろうと、岳はユリという女の子と、確かな繋がりを得ていたのだ。

そして今も、繋がっている。

ちっぽけな文明の利器が、二人の存在を繋いでいたんだ。

それは入学式を控えた、ある日のこと……。

一章（2）

2

桜の花も盛りを越えてきた。

それでも校舎から少し離れた場所にあるグラウンドにまで、桜の花は花弁を散らしている。風にその身を預け、淡い桃色を広げあいながら。ひらりひらりと。

彼はその手を大きく振りかぶった。

試合は九回表、出塁なしでツーアウト、ワンストライク。そしてノーボール。

春の陽光に照らされる中、野球グラウンドは緊張に包まれていた。二・三年が集う中、マウンドにいるのは、まだ入部したての新年生。

おろしたてのユニフォームは、まだ色褪せていない濃紺で、アンダーシャツの黒も真新しい。試合中、土のついた白いズボンでさえも、どこか光り輝いていた。

彼の振りかぶった手から、白球が放たれた。

まっすぐに突き進む白球は、高校生が放つものとは思えないほど速く、そして鋭い。誰も寄せ付けけないと言つかのような、そんな強ささえ秘めていた。

——パァン！

「ツーストライク！」

キャッチャーミットに突き刺さる音さえも激しい。

桜の花弁が舞い散り、淡い香りがグラウンドを包み込む中。

主審の声が響き渡った。

「あー……。頭痛えし、背中も痛え」

日曜日の午後。晴れ渡った東京の空の下は、今日も賑わいを見せ
ている。

そんな中「災難だ……」と呟きながら、^{たける}岳はとぼとぼと家路をた
どっていた。

勿論背中に背負っているのは、明らかに疲れブル。

「ドンマイ、ドンマイ。きっと痣にはなつてないから安心しとけ」

「いやいや。これは絶対痣になつていって。痛えもん、すっげえ」

共に歩くのは、従兄弟の勇一^{ゆういち}だ。

整ったその顔には、心配色たつぷりの苦笑が浮かんでいる。「んな簡単にはならないって」とか言つてはみるものの、それが一体誰に向けての言葉であるのかは、定かでない。本当に岳に対して言っているのかもしれないし、はたまたそんなことはない、勇一自身に言い聞かせていたのかもしれない。

結局、真実など勇一本人にしか、解らないのだ。

しかし従兄弟同士とはいえ、よくもまあ外見はこれ見よがしに似て、中身の能力はまったくもって異なつたもんだと、常々感心してしまう。

というのも、外見で二人が違う所といえば、髪と瞳の色と、あとは身長くらいだ。岳は漆黒の髪と見る者を吸い込むような黒い瞳に、平均的な身長をしている。だがそんな岳とは違って、勇一は小麦色の髪に、水のごとく澄み渡った碧眼。それでもって長身だ。他はちよつと長めの髪から顔の形やパーツまで、何から何まで本当によく似ている。双子は無理でも、兄弟には十分に見える。実際、兄弟に間違えられることも少くない。

ただ、中身だけはまるで違う。実技教科が得意な岳とは打って変わつて、勇一はオールマイティーにこなすのだ。勉強なんか、全国で一・二を争うほどの実力者である。その所が平々凡々以下な岳にとつて、ちよつとしたコンプレックスであつた。それだけに、ア
レは絶対に竹原の遺伝子だと、岳には宣言できるのだった。上岡の
遺伝子にはきつと、勉学の文字など入っていないんだ。うん。

「まあ、手荒い歓迎だったもんな。あれ」

勇一は空を仰ぎ見ながら、でもやっぱり苦笑を浮かべて、そう呟いた。

というのも、勇一と岳はバッテリーを組んでいて。勇一は嫌でもその光景を、間近で見ざるをえなかったのだった。これまた嫌でも鮮明に覚えている。

見た限りでは、一軍ナインにいた先輩どころか二軍ナインの先輩まで、岳の元に近づいては叩いていた。頭も肩も、そして背中も。平手でグーで、叩いていた。時に髪をぐしゃぐしゃと撫で回している。痛い痛いと言っている。痛いツスよ先輩。ちよつとは手加減して下さいって――。

さすがの岳も困惑していて。ホームベース後方にいる勇一へと、秘かに視線のみで助けを求めていたのだ。俺を助けろと。それは直球よろしく、着実に勇一の元まで届いたのだ――が、勇一はあえてスルーしてしまったのだった。

……いや、違う。『遠くから見守る』ことを心に決めたのだ。

勇一は岳からの痛い視線を感じながらも、すくつと立ち上がるとミットを取ってそのまま立ち去ろうとして、

「オイ、コラ。待て勇一――！」

岳は勿論、黙ってはいなかった。このままじゃ鯉ならぬ『岳のたたき』にされちゃう！

身を乗り出す勢いで、岳は勇一を止めようとした。が、叩くのには夢中だった先輩がそれに気付き、逆に岳は押しつぶされる勢いで身を乗り出されてしまったのだ。さっきまで活躍をしていた者への扱いでは、最早ない。

ギャツと微妙な悲鳴が、先輩たちの中心で聞こえた。先輩たちは真顔で聞こえないフリをした。

「なー、竹原ア。お前んトコの旦那が助けを求めているぞー」

「いいのかねえー。亭主関白じゃないのー、お宅？」

先輩たちはそれはそれは楽しそうに、岳を押しつぶしながら勇一

を見ていて。その表情からして、今後の展開を心待ちにしていることは明白だ。

勇一はマウンド上の人山を見つめて、それから青い空を見つめて「すいません。うちはカカア天下なんで」

サイン送らないとボール、投げませんしね。と言い残すと、勇一はグラウンドの端へと消えていった。数秒の後に悲しい投手の役割を理解した先輩は、カカア天下だと爆笑していて。

遠く勇一に見守られながら岳が叩かれ続けたのは、言うまでもなく……。

岳は半眼で恨めしそうに、勇一を見つめた。

さっきのことを根に持っているのは、もう変えようのない事実で。

「手荒いで済ませられるか、コノヤロウ」

「落ち着けて、な？」

「落ち着けるかよ、コノヤロウ」

大体アレは、手荒いどころの問題じゃない。手荒い歓迎くらいだったら、何でこんなに身体のいたる所が痛くなるんだ？ 手加減も容赦もないだろう、絶対。

チクシヨウ。こんなことになるんなら、監督の「本気でやれ」なんていう指示になんか、従わなきゃよかった。だって、ほれ見る。完全試合なんかしたらさあ、このざまだよ？ 全身ありえないくらい痛いよ？

ぶつくさと念仏のように呟きまくっていた岳の声は、空しくも都会の空へと消え入ってゆく。途中、幾人もの人にすれ違いざま、不審なものを見る目を向けられた。

勇一的にはこういう時ほど居心地が悪くなるのだが、生憎岳にやめると言っても無駄なのは、百も承知。どこまでもイン・ザ・マイワールドでゴーイング・マイウェイなのだ、岳は。

「なア、勇一。痣になってねえか？ この辺」

そう言くと、岳は肩の辺りを指差した。が、見えるのは当たり前のごとくグレーの学ランオンリー。超能力でもなけりゃ、素肌が見

えるわけもない。

「あー、大丈夫だよ大丈夫。万が一に痣ができていたとしても、死にやあしないって」

「何だよそれ。それじゃあまるで、俺がバケモノみたいな言い草じゃん」

並んで歩く勇一を、岳は切れ長の目で睨みつける。と、今度は本当に笑いながら、

「まーな。お前はバケモン投手だよ。捕手の太鼓判つきのね」

「なんじゃそりゃ」

ほんと、わけが解らない。

岳は悪戯っぽく笑いながら、勇一の脇腹を肘で小突いた。痛いとか悪かったとか勇一は言っているが、いつその際にシナイ。それどころかグレードアップしてしまいたい気分だ。岳は聞こえないふりをして、勇一を小突き続ける。

すれ違ったオバサマが、微笑ましそうに二人を見て、笑っていた。あー……。また兄弟と見間違えられたな、こりゃ。

よくあることとはいえ、不愉快なのは否めない。

風が一つ吹いた。前髪が目にかかってうっとおしい。

「最つ悪」

岳は呟きながら前髪を掻き上げると、八つ当たり気味にさっきよりも強く勇一を小突いた。

——許せ勇一。

車道は赤いラインが途切れることなく続いている。

学校にいた時とはまったく違う、排ガスにまみれた風が忙しなく駆け抜けていき。

高層ビルとの間では、その存在を主張しあうかのように甲高く、時に低い声をあげながら風は吹き抜けていった。

車と同じように赤い光を点している信号を前に、二人は立ち止まった。

色はついさっき変わったばかりのようで、しばらくは待たされそ

うだ。

勇一を小突くのをやめてから、バカみたいな日常会話もぷつぷつとやむ。

親と同年代くらいのスーツに身を纏ったオジサンやデパートの紙袋を提げたオバサン。二人のような部活帰りの高校生など、多くの人が信号を待つて、密集している。

その中で岳と勇一は、少しは息苦しくない車道側にいた。

それでもタバコや香水やポマードの混ざり合った、何とも形容しがたいにおいは、容赦なく襲いかかってくる。これはもう、無視するしかなかった。

走り去る車は、高速道路と間違っているんじゃないかってくらいのスピードで、集団の横を通り抜けていく。

ビュンと一台が通るたびに、長めの髪が眼前へと現れては力なく戻っていった。

それを何回繰り返しただろう。

視界の端で、隣の歩行者信号が赤くなった。

自動車用の信号も続けとばかりに色を変えていく。

数秒の後、こちら側の信号が一斉に青に変わった。

知っている奴なんかそうそういやしないのに、気持ち悪いほどぴたりと息を合わせ、集団はわさわさと歩き出す。

アスファルトに描かれた白線は、一步一步確実に、飲み込まれていく。

……………はずだった。

皆が足を踏み出した瞬間、空気を割くようなクラクションの音が、あがった。

驚いた彼らは、踏み出したその足をビクリと止める。

クラクションは今もなお、響き続けていた。

わけが解らない。

一体何があつたんだ？ と岳は勇一の顔を見ようとして、

——何故か右半身に衝撃があつた。

多分一瞬の出来事だったはずだ。

なのに、そこにいた多くの人々の、多くの恐怖に歪んだ顔が。岳の視界いっぱい、一気に飛び込んできたのだ。

——え、何？

その後は何も解らなかった。

一瞬の間に、多くのことが起こりすぎたんだ。

岳の足は地面から離れた。

同時に脇腹にあった衝撃はありえないくらいの熱を帯びて、呼吸ができなくなる。

肺から一気に空気が奪われていった。

熱は激痛に変わって、岳に襲いかかってきた。

激痛はじわじわと、岳の身体を蝕んでいく。

声に出すことのできない悲鳴が、頭の中を駆け巡った。

咽喉の奥から、熱いものが込み上げてくる。

——血？

ギョツと目を瞑る直前、誰かがアスファルトに倒れるのが見えて

建ち並ぶビルの中で、悲鳴が反響した。

ざわめく集団は倒れている二人を遠巻きに見ている。

赤い海が広がり続ける中、彼らは身動き一つしない。

無残に散らばった部活の道具が、だからこそ非日常的だった。

二章 止められた時間

気が付けば、そこは今までに見たこともないような、ひどく寂しい場所だった。

見渡すかぎり一面が、闇をも喰らうのではないかというほどの漆黒の空間で、それはどこまでもどこまでも続いている。まるで果てがないかのようだった。

そこに岳^{たけ}は一人、寝そべっていた。

他には、誰もいない。

ぼんやりとする意識の中、岳はゆっくりと、その場に立ち上がった。

……そういえば、目覚めてからずっと違和感を感じる。

真っ暗な闇は四方から忍び寄っていた。まるで岳を飲み込まんばかりに……。

目を開けてからというものの、一向に変化を見せない空間は、この上なく気味悪かった。

自分一人しか存在しない不安や恐怖が、真っ先に岳の心を覆い尽くした。

背筋に緊張が走り抜けていった。

思えば、身体中に感じていた激痛は嘘のように引いている。今や痛みのカケラさえ、微塵も残ってはいないのだ。

どうなっているんだよ。と、岳は眉根を寄せ、ぐるっと辺りを見渡した。

しかし、風景はどこを見ても、変わるなどない。

岳は掌で、顔を覆った。

覆ったところで、状況は何も変わらなかった。

それにしても……何とも奇妙な場所だった。

闇のように真っ暗かといえば、そういうわけではない。

確かにどこを見渡しても、黒以外の色彩など、存在しないのだ。しかし自分自身の持っている色彩は、まるで明るい所にでもいるかのごとく、はっきりと認識することができる。真っ黒に塗りたくられた箱の中に、閉じ込められているような気分だった。

ぞくぞくした。マウンドに立つ時のようなものじゃなくて、もつと別の。……言葉にすれば、畏怖とか驚怖きょうふとかに分類されるような不愉快な悪寒。掌にはじつとりと、嫌な汗が纏わり付いていた。

それに何だ……？ この浮遊感と安定感とが混ざり合ったような感覚。

車や船に酔った時の気持ち悪さというよりもだ。感じるのは、むしろジェットコースターで落ちる時みたいな、あの内臓的な物が浮いているかのような気持ち悪さだった。微妙な嘔吐感が断続的に現れている。吐けば楽になるのだろうが、嘔吐感が弱すぎて、それさえも叶わない。もどかしさと悪気分でイライラした。

「ちくしょう……ッ」

周囲と同色の足元を、岳はおもいつき蹴りつける。

実際自分は浮いていて、蹴ったりしたらスカして転ぶんじゃないか……。そんなくだらぬことを、岳は足を振り下ろした瞬間に、頭の片隅で思った。だが幸いにも、ちゃんとした足元があるようで、スカさず済む。心なしか、ホッとした。

ただこれを足元と呼ぶのは、他でもない。岳の立っているこの場所が、明らかに地面とは異なる物だったからだ。そして何より、認めたくもなかったから……。

岳は大きく息を吸い込むと、もう一度辺りを見渡した。

そこにはやっぱり誰もいない。

孤独という言葉が形として現れたような場所だった。

……何て所に来てしまったんだろう。こんな心苦しくなるような悲しみに溢れている場所に。何で来てしまったんだろうか……。

岳は途方に暮れ、何もない漆黒の闇を仰いだ。

すると、あの時の光景が、岳の脳裏をよぎったのだった。

自らの身に起きた、あの忌々しい出来事が――。

（……そうだ。あの時は俺は、確かに撥ねられたんだ。あの時は何も解らなかったけど、それは変えようのない真実で、実際にこの身に起こったこと）

冷静に考えてみれば、ここは多分生物の行く末なんだろう。今まで感じたことも見たこともないわけだ。だって一度しか行けない場所なんだから。

痛みを発していたはずの身体に、もう痛みはない。

出血していたはずの傷口も、今はどこにも見当たらない。

それは嬉しいようだ。……でも、途轍もなく遣る瀬無かった。

あまりにも無傷な己の姿が、どうしてもいたたまれなくて――

「……………」

何を欲すれば、何をすれば。

一体何が己を救うであろうか。

すべきことが解らない。

何を求めているのかも解らない。

ただ、目の前に突きつけられた、あまりにも残酷な運命が。

どうしようもなく受け入れがたくて……。

岳は必死に、己の身体を抱きしめた。

包み込んでくれる者なんて、ここには誰一人としていやしない。

どこまでも広がる孤独の中で、岳は一人、震えていた。

これから直面するであろう、最後の試練に。

どれくらいの時が過ぎたんだろう。

時計もなければ陽の光も空腹感も、この場所にはなかった。ただ無造作に時が流れているのは紛れもない事実なのだが、それが一体どれくらいなのかは、皆目見当もつかない。岳には最早時間の感覚さえ、なくなっていたのだ。

……いや。そもそもにしてこの場所に『時間』というものが存在

するのだろうか？

こんな場所に時間というものがなくなたって、何ら不思議じゃないではないか。

そういう場所なんだよ、ここは。

足は微かに震えている。

腕に抱き、丸めた背中があまりにも弱々しい、その風貌。

漆黒のこの場所で、岳は唇を噛み締めて耐えていた。

長い間、ずっとずっと耐えていた。

いつまでもこうしているわけにはいかないけど。今だけはこのまま……。

長い息を吐き出して、岳はギュッと目を瞑った。

闇は何かを、喰らっていた。

二章（2）

1

何をしても、苦痛なんてなかった。

抱きかかえた自らの背に爪が突き立てられようと、強く唇を噛み締めようと。

普段は痛みを感じることにさえ、何の感覚も持たない。

それは不思議と、心にまで侵食していた。

さっきまではあれほど苦しかった『死』への恐怖。

何よりも辛くて苦しくて、どう足掻いたところで救われることのない。知っていたけど向かい合えなかったこの運命に対しても、今は大した恐怖さえ感じられなかった。

震えはいっしか消え去って、己を抱きしめる腕からは徐々に力が抜けていた。乱れた呼吸は知らぬ間に平常に戻っていて、漠然とした恐怖は消え去っている。

不謹慎かもしれないけど、気持ちは自然と楽だった。

何かが麻痺していると思った。

闇が全ての苦痛を喰らっているとも思った。

ただ、それがよかったのか悪かったかのなんて、たける岳には解るはずもなかった。

楽になれた。苦痛から逃れられた。

それだけが事実であり、今岳の置かれている状況でもあった。

岳はゆっくりと背に回した手を下ろす。さっきまで放したくなかった温もりは、意外にもあっさりと、その場を離れていく。丸めた上体をゆっくり起こすと、背骨が微かに軋んだ。痛みはないのに、何故か億劫だった。

顔を上げ、天を仰ぎ見る。そこはやはり、闇に覆い尽くされていた。夜空よりも遠く、どこまでも続いているようで。そして何もか

もを飲み、喰らっているかのようだった。穴なんてないけれど、こ
こは確かに、ぽっかりと開けていた。そして岳は喰らわれ、飲み込
まれていた。

ふうと長い息が、漏れる。

目を瞑ってもそこは闇に覆われていて、もう自分は逃れられない
のだと岳は悟った。

どこを見ても、闇がある。

どこへ逃げようとも、闇は追ってくる。

ああ、そうか。

今更足掻いた所で、何の意味もなさないんだ。

自分は、これから死ぬ。

確かめたわけではないけど、でもそれはきつと、紛れもない事実
なんだろう。

諦めにも似た感情が、岳の中で芽生えていた。

勿論今だって怖いし気持ち悪いし、そういう感情を拭いきること
はできない。

でも、どうしようもないこともあるって、知っている。

これはどうしようもないことの、一つだ。

——後は、なるようになるしかない。

「どうやら心の支度は、できたようだね」

静けさを割って聞こえてきた声は、若い男のものようだ。

今まで誰も見当たらなかったこの空間に、まさか他に誰かがいる
とは到底思えない。何の前触れもなく現れたその声に、岳は背筋を
跳ねさせた。

振り返ってみると誰もいなかった空間に、一人の青年がいるでは
ないか。

下に着ている服もその上に纏っているローブも、闇と同じ漆黒で、
オフホワイトのジーンズと服の襟に入った白いラインが妙に浮いて

いる。ロープを止めるためか、複雑に絡まった鎖が首から下げられており、そこには碧色の十字架が揺れていた。二重螺旋の鎖には彼の背丈をはるかに越す、鈍色の鎌が吊るされている。彼の頭上後方で、鎌首が生々しく輝きを放っていた。

彼はそんな格好をしているにもかかわらず、岳に向かって。まるで邪気のない、不気味な笑みを浮かべていた。

岳の背は、まるで見えない刃物をあてがわれているかのように、ピンと伸びる。

物事を悟ったのは、それからしばらく経ってからだった。

こいつ、死神——？

大きな鎌が禍々しく光っている。

ああ。俺、とうとう死ぬんだ——。

肩の下で切りそろえられた彼の髪が、静かに揺れる。

一歩ずつ、でも確実に。近づいてくる青年を岳は拒むことも忘れて、見ていた。

……いや、違う。目が離せなかったんだ。

岳は思わず、生唾を飲み込んだ。

彼は岳の前に来て、ぴたと止まった。

「もう君は、僕が死神だつていうことを解っているようだね」

薄ら笑いを浮かべている彼はそう言うと、くすくすと笑っている。冷やかな空気が、微かに震えた。

岳は言葉もなく、頷いた。

「でも、君は一つ大きな勘違いをしている。……それが何か、解るかな？」

「……まったくもって、解りません」

考えた末、今度はちゃんと口を開いて言う。

しかしその声は岳自身でもよく解るほど、震えていた。

「気味が悪い……。こいつが、俺を殺す以外に一体何をするといいんだ。……勘違いをしている？ この状況で何を勘違いする必要があるよ。」

彼の目はどこまでもまっすぐ、岳を見据えている。まるで穢れを知らない瞳は、だからこそ今まで見てきた何よりも恐ろしかった。何もかもを見られているようで、恐ろしかった――。

一歩後退ろうと、岳は足を引こうとした。

が、どうしてか足はピクリとも動きやしない。

神経なんて抜かれたことはない。けど、それみたく足には力が入らなくて……。岳は動くどころか、望んでもいないのに、その場に座り込んでしまった。

一気にいろんなことが起こりすぎて、岳は混乱した。

見上げた視線の先で、彼はじつと岳を見ていた。

あの、瞳で。

ヤバイヤバイって本能が悲鳴をあげている。

それなのに、身体は岳の気持ちとは相反して、焦れば焦るほど力が抜けていく。

どうしたらいいのかなんて、考えるのも億劫なほどに身体はだるい。

でも岳はそれさえも無視して、思考を必死に巡らせた。

眼前で彼は、あの鈍色の鎌を揺らめかしている。

彼の双眸は闇を含んで、密やかな微笑を浮かべていた。

もう何に対してゾッとしているのか、解らない。

心も身体も精神も、何もかもが震え上がっているような気がしてならない。

彼は、岳の前にしゃがみ込んだ。

目の位置を岳と合わせると、彼は今まで以上にっこりと顔をほころばせた。

その顔はまるで人形のように美しく、感情がなかった。そして――
「君はこれから、罪を償うんだよ」

彼の声は、あまりにも澄み渡っていた。

「罪……？」

岳は思わず、聞き返していた。

それもそのはずだ。岳はこんな所に送られるような罪など、犯した覚えもないのだ。それにあるとしても、せいぜい幼少時に誰もがやったような、幼稚な悪戯や喧嘩くらいだ。他には何もない。償う罪なんてものはないのだ。

「そう。罪だよ」

それでも彼は、躊躇いもなしに首肯している。

「君はその罪を償わなきゃいけないんだ。……死ぬなんてこと、君には許されていない」

「許されないって、じゃあ……」

何で死神がいるんだよ。死なないんだったら、何で死神なんか？ 混乱した脳内には、やはり混乱にまみれた言葉が駆け巡っていた。同じ言葉が、同じ疑問が。何度も何度も頭の中に浮かんでは過ぎ去っていく。

身を包む黒装束から雪のように繊細な肌を覗かせている彼は、そこにある漆黒の双眸でじつと岳を見つめていた。分けられた長い前髪が、風もないのに時折ふわりと揺れていて、与えているのは黒いオーラというよりも、むしろ幻想的なものだった。

だが、その幻想的な雰囲気も、心を和ませるようなものではないのだ。出ているのはもっと別の。……差し詰め、心を凍らせるようなものだった。

岳は胸がざわめくのを覚えた。

勿論彼は、顔も身体も骸骨じゃないし、見た目だって、普通の人間と変わりはない。

だけど彼は、確かに死神そのものだったのだ。

纏っている物から雰囲気から。

全てが全て、誰もが想像する、死神そのものだった。

光もないのに、あの鈍色の大きな鎌はぬらりと不気味な輝きを放っている。その切っ先は朝露にでも濡れているかのごとく、一際輝

いていた。

漆黒のローブが、やはり風もないのに大きく靡いた。
闇に覆われたこの空間。

ピンからキリまで、普通とはかけ離れていた。

岳の腹の底は、どんどん冷たくなってくる。

死をつかさどる者。

それが死神じゃないのか――？

「……さっきも言ったけど。君はやっぱ、間違った思考を持っているようだね」

困ったように――けれど楽しそうに。彼は微笑みかけながら言葉を紡いでいく。

「言っちゃ悪いけど、死神は何も、人の魂魄を冥界に送るだけ取り柄じゃないんだよ」

彼はそう言つと、座り込んでいる岳に手を差し伸べ、岳を立ち上がらせた。足元にしっかりとついているはずの足は、しかしどこか覚束ない。

だが、それよりも――

「岳くんだってそうでしょ？ 学生だからって勉強しからないわけじゃない。部活もやれば、友達と息抜きだってする。……バイトとかする人も、生徒会の活動とかをする人もいるだろうね。結局はそれと同じで、僕ら死神も他に仕事がいくつかあるんだよ」

「ちよつと待てよ！ お前……何で俺の名前、知ってるんだよ。それに……」

それに何で俺の聞きたかったことを――？

岳が困惑に狼狽える中、彼は口元に手を当て、クスリと笑った。

「君の名前は『上岡岳』。六月二十四日生まれで、高校一年生。家庭環境は恵まれており、部活動は野球部に所属。持って生まれた才能からか、入部したてにもかかわらず、現在はスポーツの名門と呼ばれる高校にて、既に一軍に籍を置いている。去年は夏の中体連の大会で全国優勝の実績を持ち、その実力はプロ並みと称さ

れた。今注目ナンバーワンの投手」

何だよ、こいつ……。

「……僕くらいの死神になら、これくらいは解るんだよ。勿論、今岳くんが考えていることとかも、ね」

彼の瞳が、不気味に揺れた。

漆黒の彼の瞳は、まるで底なしの泉のようだった。

そこからは何もかもを見透かされているのに、こちらから相手を窺うことはできない。

一方的な攻撃だった。

自然と呼吸が、荒くなっていく。

どうしようもない。

怖い。

漠然とした恐怖が、でも確実に。岳の身を蝕んでいた。

身体が震える。

声が出ない。

それなのに視線は彼に向けられたままだ。

放すことが、できなかったのだ。

彼は今も笑っている。

何もかもを見透かして、岳の心理を探り続けて。

少年のように、ありのままに。

彼は感情を露にしているのだ。

「岳くん。逃げようだなんて、思っちゃいけないよ」

闇はどこまでも広がり続けている。

彼は少し前かがみになり、岳と視線を合わせた。

すると彼は手を伸ばし、ふわと岳の頭をひと撫でした。

目も瞑ることなく、ただ息のみを潜めて。

岳はそれに耐えていた。

撫でた彼の手は、やはり人間のように温かった。

そして。

彼はその手をゆっくりと放した。

だがそこに残るのは、冷たい恐怖だけだった。

彼はにっこりと微笑み、

「罪を償いきるまでは、君は囚われの身なんだから」
すると突然、身体がだるくなつた。

視界は霞み、頭はくらくらとして……。

朦朧とする意識の中、彼はずっと微笑んでいた。
闇の端には。

もう一つの人影が、あつた気がした。

三章 偶然は君色

生命維持装置が、今の岳の命をつないでいた。^{たける}

医者は言うのだ。

この子が今生きているのが、不思議なくらいだと。

普通なら即死をしてもおかしくないほどの状態だったと。

もう、この子が目覚めることはないかもしれない、と……。

岳の身を包むのは、白い包帯とガーゼばかりだった。

素肌が露となっている部分のほうは、断然少ない。

頭の先から足の先まで。

ほとんどが包帯に覆われていて。

重苦しい生命維持装置が、そんな岳につながっていた。

岳は身動き一つ、とることもない。

頭部強打。

打撲。

切り傷。

骨折。

そして、内臓破裂。

意識不明で、回復の見込みなし。

岳に下された診察結果は、残酷なものだった。

無機質な音が、岳を包み込んでいた。

1

妙に身体がだるかった。

重苦しいというよりも痛いというよりも、むしろ億劫というか。

徒広い闇が視界を包み込んでいて、意識はあるけど感覚は鈍くて。

風邪をひいた時と、どこか似ていた。
微かにににおいう消毒液の香りだとか。

冴えていないのに大きく聞こえる周囲の音だとか。
動かしたくても動かない身体だとか。
そういうのがどこことなく似ていた。

瞼も重いし、何もやりたくはなかった。

…… もう一度寝よう。

まだ寝ていてもいいはずだ。

そうだよ。

もう一度、寝よう。

大きく心地良い音に包まれながら。

意識が深い闇の中に持っていかれるのを、
岳は感じていた。

三章 (2)

2

「この子、……どうしたの？」

連休中に何があったというのだろう。集中治療室に入ると、全身包帯巻きの子がいた。

「あ、葉柳^{はやなぎ}さあん。上岡^{かみおか}くんの担当ですかあ？」

「まあ、そうなんだけどね。でも……」

何でこの子はこんな怪我をしているんだ？

確かに病院に勤めていれば、こういう怪我をする人との対面も少なくはないのかもしれない。けれど、まだ勤めてこの方二年ちょいの看護師——葉柳^{はやなぎ}鈴子^{りんこ}にとっては、未だかつて遭遇したこともない状況であつた。……でもだ。

「なんかですねえ、事故に遭つたらしいんですよ」

何でこいつはこんなにも冷静でいられるんだ？ と、鈴子は後輩看護師を見やった。

「事故？」

「そうなんですよあ。一週間前に運ばれてきたんですう」

眉根を寄せながら怪訝そうに聞けば、後輩看護師はそう間延びな声で答えてきた。ついでにいえば、鈴子にカルテを押し付けて。

「容態は書いてあるとおりなんですけどお、もうほんとすごかつたんですからあ。なんてつたつてえ、上岡くんつては有名な子でしょあ？ それに都心でこんな事故が起こつたつていうのもあつてえ、もう大変ー。マスコミとかがおしかけてきてえ、病院中がてんやわんやだつたんですからあ」

とか言うわりには、全然大変だったようには聞こえない口調だ。つていうか、ぶりっこ語をくっちゃべる口元に手なんか持つてきているし。

どっちかっていえば「まあ、すごいわくわくしちゃいましたよー」……とか言い出しそうな雰囲気である。本人を前にして、なんとも不謹慎極まりない。よく看護師でやっていられるなと褒めてやりたいくらいだ。

「へえ……。あの野球少年のね」

でもそんな後輩のことなど、どうでもいいのだ。問題なのは今まさに目の前にいる、この野球少年なのである。

助けられるのか、られないのか。その瀬戸際に立たされている、この少年なのだから。

「でも可哀想ですよねえ。……なんかあ、助からないらしいっていうかあ」

そう言つと、彼女はちらと岳のほうに視線を向けた。

……確かに。こりやあ相当な重体患者だな。

ぺらぺらとカルテをめくりながら、鈴子も岳をちらと見た。

そこにいるのは、とても十五歳の少年とは思えなかった。……いや、少なくとも一週間前まで元気に走り回っていたであろう少年には、到底思えなかった。というべきか。

全身に巻かれた包帯は、所々血や血漿で赤や黄色に染まっている。片方しか見えてない目は固く瞑られているし、動く気配もまったく感じさせない。彼の隣には重々しい生命維持装置なんかがあるし、彼はそれにつながれているし。……とてもじゃないが、見ていられないような状態だ。

医者でもない若造な看護師から見ても、この子が助かるようには見えなかった。いざ助かったとしても植物状態か、よくて後遺症に苦しむか……。

ヤバイな。とんでもない子の担当になったぞ、こりや。カルテと岳を交互に見ながら、鈴子は心中そう呟いた。

本当のことに気付くのに、大して時間はかからなかった。

包帯を巻き直してくれと岳の主治医に言われて、大量の包帯とガーゼと消毒液を抱えると、鈴子は緊迫している集中治療室内を進んでいった。

それもそのはずだ。ここに入った患者は、もうみんな危険な状態なのだ。緊迫しないわけがない。解っている。でも、鈴子はこの空気が、正直あまり得意ではなかった。

「上岡くん。包帯取り替えるよ」

って、言ったところで返事は返ってこないのだ。言っただけ目覚めるんなら、小難しい治療なんて必要ないし。でもそれが看護師の義務っていえばそうなるわけで。鈴子はまったく目覚める気配のない岳に声をかけてから、包帯を換え始めた。

とはいえ、本当にこの子は何をしたのだろうというくらいの怪我だった。

打ち付けた時に、ぱつくりと裂けてしまったんだろうか。

頭に巻いてある包帯は、取れば取るほど血に染まっている。それも、最初のほうは血も乾いて赤黒く固まっていた。だが、下層部にいけばいくほど、まだ微かに湿っていて、赤い色も鮮明なのだ。一週間も経っているのに血が固まらないだなんて、何か別の病気にでもかかっているんじゃないかと思えない。

手に色付く血は、冷たかった。

鈴子はそれでもぐるぐるぐると包帯を取って——思わず息を呑んだ。

（うそ。冗談でしょこれ——）

額の左側には、それこそ大きな傷跡があった。どれくらいだろう。そこは何針も縫われていて。血は止まっているが、やっぱりちよつと湿っていた。それに赤黒い血の痕や瘡蓋の下は、紫色に染まっている。

……いや。それだけじゃない。

その紫色に鬱血した肌は、先ほどまで隠れていた左目の、その下の頬にまで侵食しているのだ。しかもそれだけに留まらず、痛々し

い擦り傷が、広がっている。目なんて、もう見えなくなるんじゃないかって。そうとしか思わせないような傷で……。

思っていたよりも酷い状況だったのだ、この子は。

きつとこんなことになる前は、いくら有名だろうが、何だろうが毎日が楽しかったのだろう。この年頃つてのが、一番楽しかったと思えるのだから、きつとそうに違いない。でも、こんな状態になつて、回復しないかもしれないだなんて。……そんなの、酷すぎる。

脱脂綿に消毒液を含ませながら、鈴子は唇をギュツと噛んだ。

スーツとするような消毒液の独特なおいが、鼻腔をくすぐっている。

ピンセットでそれを持って。この傷口に当てるのかと思うと、心が痛んだ。

痛いんだろうな。

意識がないからといっても、きつと痛いんだろうな。

沁みるんだろうな。

だけど、これはやらなきゃいけないこと。

いくら痛かろうが沁みようが、そんなことは関係ないんだ。

妙な感傷なんて、生んじやいけない。

看護師の義務として。

この子を救う手助けとして。

鈴子はそつと、傷口に脱脂綿を当てた。

岳は……身じろぎ一つ、することはなかった。

「……………」

鈴子は消毒液を塗っていく。時折ピチャピチャと、微かな水音をたてることもあった。

消毒液に濡れた脱脂綿は、乾いた血を吸って、赤くなっていく。覗き見なくても、岳の顔は鈴子にはよく見えていた。

傷だらけになった左顔面の、そこにある瞼はやはり瞑られている。下方を見やれば、それこそ包帯だらけだし、勿論動きもしないのだ。本当に、この子が生きているようには見えなかった。

だが、岳は確かに生きている。上下に揺れ動く胸と温かな体温、そして波長を記す心電図。それらが岳が生きているということを、確かに証明しているのだ。

鈴子は岳の左顔面に真っ白なガーゼを当てると、一度手を止めてそれから包帯をその手に取った。

「ちよつと我慢しててねー」

空しいくらいに、鈴子の声は大きく聞こえた。

悲しい微笑をその顔に浮かべながら、鈴子は岳の頭に包帯を巻き始めた。

白い包帯は巻かれるたびに、するすると小さく声をあげた。

心にはぼつかりと穴が空いたみたいだった。痛いのか吸い込まれそうなのか、それさえも解らない。ただ、この子は助かるのだろうか。そんなどうしようもない疑問だけが、鈴子の心に大きな穴を広げていた。

鈴子ははあと息をついた。

さつきからてきぱきとやっているはずなのに、作業のほうはほとんど進んでいなかった。

いや。ほとんど進んでいるように、見えないのだ。

それだけ、岳の怪我が酷いということなのだろうか。

右手首の包帯を取り外しながら、鈴子はそんなことを感じていた。

……でも、そのとおりなのかもしれない。だって鈴子は、右手だけでもう二回も包帯を巻いているのだ。そして手首で三回目。異常すぎるほどだ。

しんと静まり返った治療室の中は、心電図の音と鈴子の作業する僅かな音に包まれていた。窓から射し込む陽光は、白いブラインドの合間をくぐり抜けて、室内を淡く照らしている。そんな閉鎖された異空間の中に、二人はいた。

するつと儚い音をたてて、包帯は岳の手から離れた。眼前に現れ

たその手首は、痛々しいほどに腫れあがり、赤黒く変色していた。折れてないとはいえ、一目で無事ではないことが窺える。

だが、それにしても。と、鈴子は思ふのだった。

さつきから包帯を巻いていて解つたのだが、岳の体つきはさほど常人と変わらないのだ。中学生でプロ並みと称されたのだからマツチヨなのかといえ、全然そうでもない。どこにでもいそうな男子高校生の体つきと、ほぼ一緒。違ふのは掌にある、ほんの些細な肉刺くらいなものだ。

「この子から実は、百五十キロ超というボールが放たれるんだよ」なんて言われたつて、これじゃあ到底信じられない。野球なんて大して知らないけど、そんな鈴子だつて、まず信じやしないだろう。それによく見れば、野球選手にしては岳は小柄な体軀だ。よくこれで肩を壊さないと、正直不思議でならなかった。

湿布を貼つてから、鈴子は再び包帯を巻く作業に入る。男にしては細いであろう手首は、本当によく折れなかったなと褒めてやりたいくらいだ。

するすると慣れた手つきで、鈴子は包帯を巻きに巻く。きつくもなく緩くもない巻き方は、もう慣れたもんだ。

巻き終わると留め金で包帯を留め、紙テープを留め金の上に貼り付けた。全ての包帯を巻き終えた右腕を、鈴子はそつと身体の横に戻す。そして残っている両足のほうを見やりながら、岳に向かって何となく話しかけていた。

「ねえ、マウンドに立つつてさ、どんな気分なの？」

勿論返事が返つてこないことなど、承知済みだ。それでも鈴子は話し続けた。

「ボール投げるんでしょ？ あそこから。キャッチャーに向かってさ、バビュンつて」

よく投げられるよなー、あんな限られたスペースに。と、鈴子は言いながら、岳の手を握つた。やっぱり野球をしているとは思えないほど、その手は細かった。

「この手で投げるんでしょ？ あんな速い球。どうやって放っているのか不思議でならないよ。ほんとにさ」

室内は穏やかだった。閉鎖されていても、隔離されていても。

「今日もいい天気だよ。外で暴れたいくらい、いい天気だよ」

ブラインドのほうを見やれば、陽光が僅かな光を、窓辺に落している。陽だまりの中で、小さな塵がキラキラと輝いていた。

時間はまるで止まったかのようにだった。それでも、時は緩やかに流れている。

「早く治しなよ」

鈴子は岳の手を、そつと握った。

岳の手は、微かに動いた。

「――！？」

はつと鈴子は振り向いた。これが虚なのか現なのか。それさえも解らなくなつて、思わず叫びたい気持ちを押さえ込んで。鈴子は自分が今握っている岳の手を、凝視する。と、その手は僅かな力ながらも、反応を見せていた。指先が微かに動き、鈴子の手はその力を伝えているのだ。

え。これ本当ですか？ とか、一瞬脳内がパニックになりながらも、鈴子はナースコールを押していて、

「先生いるッ？」

感極まつて、思わず大きな声をあげていた。

三章 (3)

3

鼻を衝いたのは、消毒液の微かなにおいだった。目は覚めていないけど。だからこそそれは鮮明に伝わってきた。身体はやっぱり億劫で。感覚もやっぱり鈍っているようだった。もう一度寝ようかとも思った。でも。

誰かに呼ばれているような気がした。耳元で聞こえる穏やかな声。言葉はまったく聞き取れやしないけど。何故か自然と温かった。

もう起きよう。
ぼんやりとする頭が、そう呟く。
そうだ、起きよう。
入らなかつた力が、今入る。
重たい瞼を持ち上げると。
うつすらと光が、射し込んできた。

4

すぐに廊下は騒がしくなった。
扉が開かれると、たける岳の主治医と数人の看護師が入ってくる。
「先生ッ！」
「反応が見られたのは、本当か？」

「はい。今も指先が動いています」

話を聞きながら歩み寄ってきた主治医は、二人の手を見て、すぐに岳の顔を窺った。

「意識は？」

「まだです」

「モニターはどうだ？」

「正常値です」

一瞬前まで静かだったとは思えないほどの豹変っぷりだった。室内はあつという間に慌しくなっている。ただ、それは悲しい騒動ではなかった。だって反応があつたのだ。一時は回復することはないと言われていたけれど。でもこのままなら、意識が回復するのもその時間はかからないだろう。

だから頑張れ。

言葉にはしないけど、鈴子^{らづみ}は心中で岳に囁きかけていた。

頑張れ、頑張れ。

これしか祈る言葉はないから。でも、精一杯の気持ちを込めて。

鈴子は握る手に、少し力を込めた。岳の手にも、少し力が籠ったような気がした。

「先生！ 上岡くんの瞼が！」

「何っ？」

一人の看護師の声に、みんなが反応する。全ての視線が、岳の顔に向けられていた。

と、確かに岳の瞼が微かに動いたのだ。意識が戻ってきているのだと、誰もが思った。

「上岡くん、頑張つて！」

つい声に出してしまった、この気持ち。

室内に大きく聞こえたそのあと、誰かが続けて「頑張つて」と言っていた。

小さな声の頑張つてコールは、何度も何度も聞こえてくる。そして岳は、その瞼をゆっくりと持ち上げた。

光は完全に、岳の双眸に入っていた。

集中治療室にいた者全員は、その顔をほころばせていて。そしてすぐに、緊張を纏うと診察に入るのだった。

ブラインド越しに、鳥の影が飛んでいくのが、確かに見えた。

痛い所はないのかとか、そんなことを言われたって……。と、岳は正直に困った。

だって痛いのは全身だし、答えようにも渴いた喉からは声も出ないし。拳句の果てには動かそうにも、身体はまったくもって動かないのだ。これで一体どうしろというのだ。

……とか何とか考えている間に診察は終わっていて、岳は鈴子と再び二人つきりになっていた。鈴子は今、岳の左足の包帯を巻き変えていた。

室内には追い出された静寂が舞い戻り、堂々と居座っている。しかし決して居心地の悪くない、そんな静寂だった。が、それも長いと飽きてくる。

重く苦しい生命維持装置は外されて、でも心電図だけは未だつなげられている。とはいえ呼吸器がないだけまだマシかと思い、岳はぼんやりと天井を眺め見ていた。

すると、鈴子が包帯を巻いている音がはたとやんだ。

「よしっ、終わったよ」

「あ。ありがとうございます」

いつもなら馬鹿みたいに、へこへこと頭を下げているのところなのだが、生憎今の岳は身体を動かせるような状況になどあるわけもない。何といっても、重傷患者なのだから。

岳は頭を下げるような素振りを見せると、かすれた声でへこへことお礼を言った。ありがとうございます。どうもすみません。岳はかすれた声で連呼した。だが鈴子は、岳の隣まで来ると突然その場にしゃがみ込み、

「いいのよ、別に。これが私たちの仕事だしさ。それに、これがなきや私、失業しちゃうよ」

とか何とか抜かしつつ、あははとそりやもう壮大に笑っていた。ちよつと心配だなこの人……。などと感じて苦笑して。そうですよねーと岳は呟いた。

「ところで、本当にもう大丈夫？　痛い所はいつぱい？」

「ええ、そりやあれだけ怪我しているようですし。痛いって言えば痛いですよ」

「あ。やっぱりそういうモンなんだ」

「はい。そういうモンですよ」

視界の端で、心電図が同じような波を繰り返し繰り返し作っている。黒い画面にエメラルドグリーンの波がちよつとカッコいいなと、岳はふと思った。

室内はどこまでも穏やかで。初対面だというのに岳は鈴子とすっかり意気投合している。

「上岡くんはどこ高校なの？」

「ながお長尾高校ツス」

「へー、やっぱりあのスポーツの名門校に行ったんだ」

「はい。やっぱり甲子園、行ってみたいんで」

岳はおもいきり笑っている。

「ってことは、やっぱり野球好き？　甲子園って憧れるの？」

「そりやそうツスよ。野球は大好きですし。それに甲子園って言うたら、高校球児の夢であり聖地ですからね」

岳はその瞳を輝かせ、力説した。

甲子園って本当に高校球児の夢なんだと、鈴子は岳を見て思った。言葉の一つひとつが弾んでいる。

「マウンドって、緊張するの？」

「まあ、それなりには。でもそれがたまらないツスよ。いい感じの緊張具合が」

「どんなにすごい人でも、緊張はするんだ」

「それでも一応は人間ツスからね」

「そうだよ、ごめんごめん」

笑いながら鈴子は謝った。

いいツスよと、岳も笑っていた。

「ところで葉柳^{はやなぎ}さんは何で看護師に？」

「何でだろうねー。気分っていうか、なりたかったんだよ」

「勉強とか、大変でしたか？」

「当ったり前よ。だって私、高校時代の成績、相当悪かったからね」

えへんと咳払いをして、鈴子は笑った。

胸を張って言う場面じゃないですよと、岳は苦笑した。

「見えませんよー。そんな風には」

「お褒めの言葉、ありがとな」

鈴子は岳の頭をくしゃつと撫でた。

痛いツスよ。と岳は笑って呟いた。

「葉柳さん。看護師って大変ツスか？」

「まあね。辛い時もありや悲しい時もあるよ」

鈴子は棚に肘をつき、ブラインドの上がった窓の外を見やった。

「でも、こうにさ。人が助かっていくのを見ると、たまらなく嬉しいね。どんな辛い時でも意欲が湧くよ」

その顔は生き生きとしていて、声もだんだんと弾んでいく。

それだけ、この仕事が好きなんだ。

気分なんかじゃなくって、真剣に決めたんだなと。

妙な確信が岳の中に芽生えていた。

「そういうモンなんスか？」

「そういうモンっすよ」

三章（4）

5

誰もが寝静まった病院は、あまりにも寂しいものだった。
音もなければ、光もない。

ただひたすらに闇が続くのみなのだ。

するとぽわんとした光が、たける岳のいる集中治療室に現れる。

それは粉雪のようにゆつくりと舞い降りてきて。

やがてそこには、一人の少年が現れた。

下のほうで一つに結った髪は長く、歩くたびにはらりと揺れる。

彼は黒いローブに身を包んでいて、しかしズボンだけはオフホワ

イトのジーンズだ。

彼は徐々に岳に歩み寄る。

そして岳の眠るベッドの脇まで来ると、その場に立ち止まった。

彼は胸元から碧色の十字架を取り出す。

月明かりに照らされた十字架は、神秘的な輝きを放っていた。

と、それを岳の胸元にかざして。

涼しい鎖の音の後。

彼は何か、言葉を紡いだ。

聞き取れないほど小さな声で、言葉を紡いでいた。

すると十字架は、淡い光を発して。

それが粉雪のように岳に降り続けていて。

少年はなおも、言葉を紡ぎ続けていた。

外には穏やかな星空が広がっていた。

6

やっと集中治療室と心電図から開放されたのは、翌日の昼過ぎの

ことだった。

昨日もそうなのだが、今日も家族がお見舞いに来てくれて。岳は嬉しいと思う反面、やっぱりちよつと、恥ずかしかった。

もう高校生なんだからと、心配を露にする両親に文句を言ってみたりして。それでも内心ではすごい感謝していた。自分は愛されているんだと、確かに実感することができたのだ。

ただし雪乃ゆきのは来なかった。もう間近に近づいてきている高校総体の練習で、今朝も早かったのだという。父も会社があるからと「大人しく寝ているんだぞ」と言い残すと、それほどせずに治療室を出ていった。

母は病室の移動が終わってからもしばらくいたが、楽団の練習があるからと「看護師さんに迷惑をかけちゃだめよ。ちゃんと大人しく寝ていなさいね」とやっぱり言い残して出ていった。

岳は「わーってるって。それに動けねえよ」と、昨日まではかすれていたはずの声を元気にあげると、そんなに子供じゃねえと唇を尖らせた。

「愛されてるねえ、少年」

ニヤニヤと笑いながら、病室の隅にいた鈴子りんこは岳に近づいていった。

「そりやどうもッス」

かつかつと静かな病室に響く靴音を、岳はちよつと不貞腐れながら聞いていた。

言われれば言われるほど、自分が子供に見られているような気がしてならない。

白いカーテンが開け放たれた窓の外で、木の葉がさわさわと踊っていた。

「愛されるっていいことだぞー、少年」

「いつまでも子供じゃないってのに」

「親から見れば、あんたはいつまでも子供だよ」

キシシと笑いながら、鈴子は岳のベッドに腰掛ける。看護師がそ

んなことをしていいのか？ と、岳は不意にそんなことを思った。

「……そりゃ、そうかもしれないですけどね。でも、俺だって十分年取ってますよ」

「十五なのにかい？ 少年」

「高校生なんて、もう十分大人ツスよ」

春の陽射しが、きらきらと病室内で輝いている。

広く広く感じる一人部屋の中を、陽光は温かに照らしていた。

鈴子は窓の外を見やりながら、その口元にふつと笑みを浮かべて。

「バーカ。高校生なんざなあ、まだ十分ガキだっつーの」

鈴子が体重をかけ直すと、ギシッとベッドが微かに軋んだ。

「解る？ 少年。高校生なんてね、やってる時は大人っぽく感じるもんなんだよ」

それほど遠くもない過去が、鈴子の瞳には浮かんていた。

陽光を受けていて、さらにその輝きを増している。

「俺はもう義務教育じゃないんだぞつて。だから誰の力もなしに生きていけるんだぞつてね。胸張っているようで本当は知らないうちにさ。バカみたいな意地を張っているもんなんだよ。それで『自分って超スゲェんじゃない？』って、勝手に感じているだけ。実際はまだまだ自分ひとりじゃ何にもできない、未熟なただのひよっこなんだよ」

懐かしい日々は、今となっては馬鹿げた思い出なのだろう。すつごい貶しながらも、鈴子の口調はこれ以上ないくらいに、弾んでいた。

「……そういうモンなんスか？」

「そういうモンっすよ、少年」

どうしてだろうな。本当にそう思っているだけなのだろうか？
今はいまいち解らないけど。いつかは解る時がくるのだろうか……。

微かな静寂が、舞い踊っていて。

疑問に眉根を寄せながら、岳は鈴子に視線を向けた。

鈴子の表情は、どこまでもどこまでも明るく華やいでいて。
清々しさと輝きに満ちていた過去とで、穏やかな雰囲気纏って
いた。

(……やっぱり今は解らねえや)

渦巻く疑問をさらに濃くして、岳はふーんと唸った。

小鳥がぴーちく、どこかで鳴いていた。

三章（5）

7

あの時の男は、一体誰だったのだろうか。

黒装束の、あの人形のような美しさを纏っていた死神の青年。
今でも瞼を下ろせば、その光景が鮮明に蘇ってくるのだ。

あの漆黒の闇も。

あの不気味に美しい青年も。

あのぬらりと輝く鈍色の大鎌も。

全てがすべて、現世とはかけ離れていた。

あれが確かに冥界だと、そう感じずにはいらなかった。

これ以上ない恐怖が、今も身体の奥底に根付いている。

決して離れることはなく、葬り去られた闇の奥底で。

今も身体を蝕んでいた。

恐怖はさらなる恐怖を生み、目を閉じるのも嫌になる。

目を閉じれば、いつもあの死神が離れなくて。

ずっと居座っては、あの微笑を浮かべ、見ているのだ。

『罪を償いきるまでは、君は囚われの身なんだから』

繰り返し繰り返しその言葉は廻って。

—— 本当に、囚われているかのような気分だった。

彼はきつと、開放たけるなんてしてくれない。

囚われたままの岳たけは、きつと囚われ続けるのだ。

この命が尽きるまで。

もしかしたらその後でさえも。

この身は彼にのつとられ続けるのだろう。

もうやめてくれ。

もう放してくれ。

迫り来る闇に魘されながら。

岳は光を求め続けた。

ガラスという音の後、妙に聞き覚えのある声がした。

あー。はやなき葉柳さんの声だな、こりや。

検温か？ それとも消毒か何かか？ と、大して入っていない脳みそを働かせながら、岳は薄っすらと瞼を上げた。

事故からそろそろ二週間が訪れようとしていた。岳の怪我は結構順調すぎるくらい順調に治っていくため、もう頭に巻かれていた包帯はないし、左腕と右足の包帯も取れていた。

今までの弊害をなくし、上げた両の瞼からは今までの倍の量の光が入ってくる。岳は思わず目を細くした。眼球の奥が、ツンと痛くなった。

左手で体重を支えながら、岳はのっそりと上体を起こす。もそもそと布団が、奇妙な音をたてていた。

「葉柳さん、何用ツス……………か？」

しょぼしょぼとしていた目は、目の前の光景を期に、パツチリと開いてしまった。それどころか、開かなくてもいい口まで、間抜けの象徴と言わんばかりにあぐりと開いている。

しばらくこの成り行きが解らずに岳はドア付近を呆然と見やっていたが、数分の後。やっと全てを飲み込むことができたのだ。

そう。それは明らかに葉柳さんじゃなくて、もつと若い――

お、…………おなごオオオオオオオオオオオオ！？

（いや。マテマテ待てえええええいッ！！んなことありえるわけがねえ！きつとこれは何かの間違いだ。きつと何か幻想とか幻覚とか、そういうヨロシクナイ類のものが見えているに違いない！

さあ。正気を取り戻せ、俺ッ！ それともこれが噂に聞く事故の後遺症なのかああああああ！？ オイツ！ 誰か我に救いの手を差し伸べてッ！！ この状況を百文字以内で説明してくれる人を、頼むから！！）

脳内が活性化しすぎて、どうにも思考がまとまらない。それどころかパニック状態に陥っていて、もう岳には何がなんだか解らなくなっていた。

勿論それはドア付近にいる女の子もそのとおりであって、阿呆面をかまされたと思ったら、今度は意味不明に悶え苦しむ岳に、嫌でも不安を隠しきれていない。ドアの取っ手に手をかけていて、腰はかなり引き気味だ。

岳は目を見開きながら、酸欠金魚のように口をパクパクさせている。

ちよつとキモキヤラ街道まっしぐらだ。

ああ……。と岳は思った。

これは今まで生きてきて、さいきょう最狂の目覚めだった。最も狂った最狂の……。

岳は混乱した。

岳は百のダメージを喰らった。

知らない敵からの攻撃は、あまりにも大きすぎている。

立ち直るには、もう少し時間が必要のようだった。

「……でー。君は一体何故にここにいるのですか？」

落ち着きを取り戻すのには、やはり多少の時間がかかった。

岳は女の子をパイプ椅子に座らせると、何と言っているのか解らず。眉根を極限にまで寄せながら、何とか苦し紛れに言葉を発したのだった。

正直今も、岳の脳内はパニック状態なのである。何とか抑えているという表現が、よく似合うほどに、だ。

勿論すぐに帰らせるという手もあったのだが、何故でしょう。昔ながらのつかえ棒でもしてあるのか、スライド式のドアはびくとも動きませんでした。誰がやったのかは、大方見当がついているから、あとで事情聴取にかけることだろう。

静かで微妙な空気の中、木の葉がさらさらと揺れる音が風に乗って聞こえてきた。

外は嘲笑っているかのような、青空だった。

岳は一つ、息をついた。

結局脳内では、何の結論も出なかった。どうしてここに見知らぬ女の子がいるのかも、何故岳の病室に入っているのかも。皆目見当がつかなかった。

ただ、岳にも解ることといえば。

二人はまったくの初対面だということ。

そしてパジャマ姿からして、彼女も入院患者であるのだろうということ。

それだけだった。

「……………あ、あの……………」

窓からは透明な風が、光を揺らしながら流れ込んできた。
か細い彼女の声が風と共に、岳の元へと届く。明らかに何をしていいのか、解らないといった状況だ。

「え、何？」

「えつと、あの……………」

もじもじと彼女は口ごもる。

そりゃあ、そうなるよなと岳は彼女に同情した。

いきなり年の近い異性の前だもんな。混乱するよな。

と、自分の今までの行動はどこ吹く風なのが、清々しいったらありやしない。

鳥がやつぱり、ピーと鳴いた。

彼女の腰掛けている椅子が、ギシツと鳴った。

「あの、迷惑……………ですよね。私」

か細い声は、詰まり詰まりの言葉を吐き出した。

迷惑。そう思うのは彼女の感じ取った罪悪感からだろう。だがその本を糾せば多分、先ほどの岳の行動にまで行き着くわけで。あの混乱状況を見れば、誰だって罪悪感の一つや二つ、抱くに違いない。彼女は今にも泣き出しそうな顔を、俯かせていた。ギュツと引き結んだ唇。膝に置いた両手も、元から白い肌がさらに白くなるくらい、強く握りしめていた。

「いやいや、別に迷惑じゃないって！　ただいきなりだったからさ、戸惑ったっていうだけであって――」

徒広い病室の中、岳の戸惑った声が大きく聞こえた。

白いカーテンは今も風に靡かれ、はためいている。

心地よい布の靡く音。岳は彼女を見つめた。

彼女は入院生活が長いのだろうか。

その肌は雪のように白く透きとおっていて、太陽の下にいたとは到底思えなかった。

それに手の甲には、注射の針を刺したであろう痕が、いくつも残っている。白い肌がそこだけくすんだ色をしていて、妙に痛々しかった。

ただ色素の薄い髪は短く、肩の辺りまでしかない。とはいえそこらにいるような女の子たちとは違って、大人しい印象を与えるような子だった。……実際にそのようだが。

しんと静まり返った空気が充滿する。

陽光はそれでも二人を照らし続けていて。

「そんな怯えなくてもいいよ。本当に迷惑じゃないし、キレたりもしないからさ」

気恥ずかしくて、ちょっと頬を赤らめながら。

「だから、うん。友達感覚で気軽に話して。っていうか今から友達っていうことでさ」

なっ。と岳は彼女に言った。

彼女は少し戸惑っていて。

だけどうんと、頷いてくれた。
その表情は、眩しかった。

やっぱりこの原因は葉柳鈴子^{はやなぎ じんこ}だったようだ。

確かに岳は鈴子から、岳と同一年の子がいるとを聞いてはいた。
……けどだ。

それが異性だとは一体誰が思うだろうか？

岳はハアとため息をついた。

隣で彼女は、困ったように微笑んでいた。

8

彼女の名前は、泉川柚莉^{いずみかわゆり}というそうだ。しかも岳と同じ、長尾高^{ながお}校の一年生らしい。

鈴子のことと時間を喰って。二人が互いの名前を知ったのも、実は随分経ってからだった。

穏やかな時を運ぶ病室内は、春の陽射しにやんわりと照らされていて。最初会った時のような戸惑いも、すぐに吹き飛ばしてくれた。自然に口から出てくる言の葉は、もう何の迷いもない。

二人は、その顔に満面の笑みを浮かべて。
でもちよつとだけ、緊張していて。

もう一度入学式をしたみたいない気分だった。
すっごい不思議な気分だった。

今までにない奇妙な感覚も。奇妙な体験も。
何もかもが新鮮に感じられるのだ。

初めこそは「何しやがったんだ、あの看護師……」と思っていた
岳も、今やそんなことなどとうに忘れていて。

退屈でならなかった入院生活の中、一つの花が舞い降りてきたかのようだった。

そう。楽しかったのだ。

幸せだったのだ。

「ねえ。岳くんはさ、何をしてる時が一番楽しい？」

青い空が、柚莉の背景になっていた。

「あー……、そうだなあ。どっちもどっちで解らないんだけどさ。野球している時と、メールしている時が好きだな」

「野球？」

「そ。でもさ、高校に入ってから部活が辛くって。練習がハードでさ」

あははと岳は苦笑した。

「でも好きでやっているんだから、文句はないけど」

「そうなんだ」

なんでもない話なのに、柚莉はそれこそ嬉しそうに笑っていた。自分のことのように、にこにこ笑っていた。

本当に、花みたいだった。

「柚莉は？ 何してる時が一番好き？」

そう言うと、柚莉はにっこりと微笑んだ。

「私もメールしている時が一番好き」

笑っているのに、その姿はあまりにも儂げで。

不純だと思っけていても、岳はちよつと、どきつとしてしまった。

「今ね、一人友達がいるの。私って病気がちだからさ。今までもあんまり学校に行けなかったし。やっと退院ができて高校に行っても、容態が悪化して、またすぐに入院しちゃったし……。だからね。初めてできた、友達なんだ」

でも岳くんとも友達だから、二人友達がいるんだね。と、柚莉は笑顔を向けてきた。

雪のように白い肌が、小柄で細い彼女の体軀が。

カーテンで区切られた、青い空を背景にして。

映っていた。

今まで何でも言えた口は、突然動かせなくなっていた。

岳は何も、答えられなかった。

なんて言葉をかけていいのか、解らなかったのだ。

今まで何の不自由もなく過ごしてきた岳には、柚莉の苦勞なんて解らなくて。

どんな言葉をかけても、陳腐なものになってしまふような気がしたから。

岳は何も言えない唇を引き結んだ。

柚莉は花のように笑っていた。

それは何よりも美しくて。

「ケータイなんてちっちゃいけどね。これでその人と繋がってるんだ」

そして、やっぱり何よりも儚かった。

花のように、本当に儚かった。

岳は柚莉を、見つめていた。

「でもね。最近その子からメールが来ないんだ」

柚莉は悲しそうに、どうしたのかね？ と首をかしげた。その表情はあまりにも寂しそうで、悲しそうで。笑っているのに痛々しかった。

「今までは毎日だったからさ。なんか寂しくって」

強がっていた。平気がっていた。

柚莉にとって初めてできた友達から、毎日来ていたメールが来なくなつて。

柚莉は笑つて、寂しさを紛らわせていた。

本当は泣きたいくらい辛いはずだ。

怒りたいくらい寂しいはずだ。

それでも柚莉は、泣いてなるものと笑っていた。

多分柚莉は、裏切りに慣れていないんだろう。

岳みたいに学校にも行つて、それなりに過ごしていれば裏切りだつてある。

友達とかだつて時に裏切り、そして消えていつて……。そんなこ

とはありえることなんだ。十分に。

でも柚莉は行きたくても学校に行けなかった。

当たり前なことでも十分にすることすらできなくなつて。裏切りとかだつて、受けたこともなかったはずだ。そして今回、初めての友に初めて裏切られたのだ。岳たちにしてみれば、ほんの些細なことかもしれない。けど、柚莉にとってはどれだけ悲しいことなのだろう。胸が潰されるような思いだった。されたことはないけど、まるで心臓を雑巾絞りでもされたかのように、苦しくて苦しくて……。

「そう、なんだ……」

岳は俯いた。窓から入ってきた風が柚莉を撫で、岳の髪を揺らしていった。

岳の声は風に吹かれ、消えていった。

「すっごい優しい子だったんだ。岳くんみたいにこんな私と友達になつてくれたし」

自らを蔑む言葉は、とても虚しかった。

『こんな私』という言葉は、やはり自分に引け目があると思つてゐるからなのだろうか。

「そんなことないよ」

たつたそれだけの言葉を、でも岳は、かけてやることさえできなかった。

柚莉は……岳とは違いすぎていた。それを言葉にすることは確かに簡単だけれど。……でもそれが、柚莉にとつて一体何になるう？ただ慰められているだけに過ぎないのではないか？それがまた、彼女を傷付けてしまうのではないのか？

恐れだけが、岳の心を蝕んでいく。

雲が太陽を覆つては、また離れていった。

さわさわとした木々の囁き。

無意味な時間だけが、無意味に過ぎ去っていく。

「どうでもいいかもしれないけどね。その子も岳くんと同じ名前だったんだ」

柚莉の小さな声が、病室に響いた。

「え？」

岳は、己の耳を疑った。

——最近？ 同じ、名前？

「重ねて見ているようで、本当に悪いとは思っているんだけどね。でも——」

「ちょッ、待つて待つた！ 今何て……？」

焦った岳の声が、柚莉の声を掻き消す。

突然のことに柚莉は驚き、岳を見つめていた。

「つてか、メールが来なくなったのつていつから？」

頭の中は、既にこんがらがる寸前だった。

岳は驚く柚莉にさえ気付かずに、痛む身体を乗り出してそう言った。

空気が微かに揺らぐ。

柚莉は戸惑いを露にして、

「え？ えと、先々週の日曜日からなんだけど……」

先々週の日曜日つて言ったら——

岳は現実を疑った。

先々週の日曜日。それは岳が事故に遭った日だったのだ。そして。

岳がメールをすることができなくなった日。

柚莉、先々週の日曜日、途切れた、メール、事故。

切り離された単語が、一つの線で結ばれていく。

「柚莉つてさ。なんて名前でメールしているの？」

「ユリだよ。片仮名でユリ」

透きとおるような柚莉の声を、岳はしかと耳にした。

線は、繋がった。

……間違いない。多分、間違いない。

岳は引き結んだ唇を、ちよつと舐めた。

「もしかしてさ。……『大切なもの』とか書いて……」

彼女は青い空を背にしていた。

青い空の向こうでは、高いビル群がこれでもかと高さを競い合っている。

下方で聞こえる通りの喧騒は、どこか遠い。

結界でも張られたかというくらい、病院は静けさに包まれていた。風が一つ、悪戯に入ってくる。

柚莉の短い髪は小川のせせらぎのように、さらさらと音をたてて靡いていた。

岳は生唾を飲み込んだ。

しばし言葉を失った柚莉は、岳をほうつと見て。

「書いた、けど……？」

何で？ という柚莉の言葉は、既に岳の頭には入ってこなかった。

……絶対、間違いない。

岳は気まずさと驚きに、思わず視線を床に彷徨わせた。

柚莉は岳を不思議そうに見ていた。

岳は信じられない思いで、目元だけはそのままに。引き攣った笑みをその口元いっぱい浮かべていた。

春の陽射しは、二人を照らしている。

夢じゃなければ彼女こそが、メールの差出人なのだろう。

妙な確信が、岳の中に芽生えていた。

風はどこまでも穏やかに、流れ続けていた。

四章 光の射す場所

はるか遠方で、赤く光る車のランプが列を成していた。
それは長いのか短いのか曖昧で。

時折騒音をあげては、走り去っていく。

窓の外は、あまりにも代わり映えのない風景だった。

少年は今日も、岳の傍らに寄り添^{たける}っている。

碧色の十字架をかざしながら。

小さく言の葉を紡ぎながら。

淡い光を舞い降らせ。

今日も、ここに。

はらりと被っていたフードが落ちた。

ダークブルーの瞳は、月明かりと十字架から発せられる光に輝い

ていた。

しかしその瞳に宿っているのは……。

少年は言の葉を紡ぎ続ける。

上弦の月が。

天高く浮かぶ中で。

1

偶然とはある意味必然だ。

そんなことを、昔誰かに言われた気がする。

でもだ。今回ののはあまりにも話が上手すぎるのではないだろうか

？ …… そう、岳は思わずにはいられなかったのだ。

それもそのはずだ。結局、柚莉とユリは同一人物だったのだから。

そうすると必然的に、岳も柚莉の言う岳と同一人物になるわけで。

岳はその後、柚莉にひたすら頭を下げ続けたのであった。

ごめんなさい。俺が岳です。ほったらかしにするつもりは、毛頭

なかったんです。ちょっと事故ってケータイと隔離されちゃったんです。でもこれって言い訳だよな。本当に申し訳ない。辛い思いをさせてしまったのはこの俺です。いや、本当になんて謝ればいいのか解らないんですけどね。あ、でも全然反省していないわけではな
いですよ。これでも精一杯の謝罪をしたいと思っ
ているんです。本当にごめんなさい。

……と、ずらずらずらずと謝り続けたのだ。途中でどうでもいいことを挿みながらも、岳は一方的に謝罪をしまくったのだ。そして治っていない足を犠牲にしてまで正座をして土下座をしよ
うとして。……そこで柚莉に止められたのである。

この時岳は、正常な思考回路をどこかに忘れていたのだ。危うく入院期間が延びる所だったなんて、冷静になるまでは砂粒ほども思いつかなかったのだ。

さすがは平均以下の学習能力である。

その後はというと鈴子呼びにきて、柚莉は検査があるとかで帰
っていった。

一人になった病室。少し傾いた午後の陽射しに照らされながら、
岳はなんともいえない思いでいたのだった。

結局鈴子を事情聴取にかけることは、すっかり頭から抜け落ちて
いた。

2

「よっす。バケモノ投手」

「よっす。バカ者投手」

「……………」

外は茜色に染まり始めていた。

入ってきて第一声の『バケモノ投手』と『バカ者投手』とで、岳
は口元をひくつかせながらドアのほうを見やった。

「怪我人なんだから大人しく寝ているよ、バケモノ投手」

「マンガなんか読んでんじゃねえよ、バカ者投手」

そこにいるのは、制服姿の幼馴染。たけはらゆういち みどりかわあやこ竹原勇一と緑川綾子だった。

片や野球道具を肩から下げ、片やテニス道具を肩から下げている。運動してきました感が、二人からは漂っていた。

「誰がバケモノだ。ってか誰がバカ者だ。オイ」

「誰って、岳しかないだろ」

「そうだよ。それとも岳には他に人でも見えるんですか？」

脳みそのほうも精密検査してもらったら？ と綾子は言った。

しねえよ。と岳は、マンガを置きながら呟いた。

「にしても、岳はやることごとことん派手だよな。勇一はもう、とつくに退院したつてのにさ。あんたが目覚める前から」

「しゃーねーだろ。真っ先に当たったのが俺だったんだから」

「こういう時だけくじ運がよくつてもねー」

せめてテストの山でも当てたらどうなの？ とか。やつぱり綾子は呆れて言った。

まったく。どこまでも容赦のない女だ。……と、岳は綾子を見ながら心底思うのだった。幼馴染が男ばかりだからか、性格も口調も、ついでに言えば体力まで男らしい。それとも引け目を見せないとても言ったほうがいいのだろうか？

見た目は少なくとも、ちよいと凛々しい女の子くらいでとおるのに……。これじゃあいつになっても嫁に行けないぞ。等々、岳はいらぬ心配をするのだった。

「あー、そうそう岳。これ、先生からの贈り物」

対峙する二人の間に入って、勇一は「はいはい、やめなさいね。

ここは病院だよ」と言いながら、岳の前までやってくる。

「はア？ 贈り物？」

「そう。贈り物」

鞆を肩から下ろしファイルを一つ取り上げると、勇一はその中身をほいと岳に渡した。

窓からは夕の茜が射し込み、渡されたプリントを淡く染め上げて

いる。

岳はそれをまじまじと見ると、急に表情を引き攣らせて……そのまま勇一を凝視した。

「……ざけんなや」

「ざけてねえよ」

「なんちゅう贈り物だよ」

「宿題という名の最高の贈り物だよ」

「できるわけねえだろ」

「ノート写しといてやったから安心しろ」

「俺の馬鹿さ加減知ってるだろ？」

「高校に受かったんだ。大丈夫」

「スポーツ推薦だよ。学力なんざ見てねえよ」

「変わりねえよ」

「あるよ」

ずらずらと出てくる言の葉は、本当に息が合っている。

互いが互いの顔を見ながら、一気に言葉を吐き出しあっているのだ。

「つーか、絶対無理」

「お前、諦め早いよ」

「だって習ってねえもん」

「だからノート写したって言っただろ」

「関係ねえよ」

「あるよ」

「ってか何で、怪我人がこんなことしなきゃならねえんだよ」

「留年したいんなら、しなくてもいいんだぞ」

「したかねえし」

「だったらやれよ」

「でも……」

「文句を言っな」

言葉を遮られて、岳はぽかんと大口を開けていた。目の前にはほ

れと突き出された宿題の数々が、ムカつくくらい白紙で踊っている。俺に何をしろと？ と、岳は勇一に向けて視線を送った。勇一は軽くスルーした。

「あ。そうだ」

するとあからさまに、綾子は岳に向かって声をかけた。

綾子もまた、鞆を下ろしてはファイルから何かを取り出し……。

「私も預かっていたんだ。先生からの贈り物」

にこやかに笑って、綾子は宿題のプリントと、写したノートを岳に渡した。

岳はそれを凝視して、再び二人の顔を見て――

窓の外は、綺麗な夕焼け空だった。

夜の訪れを感じさせる風が、病室内で踊っている。

「マジでざけんなや」

通りの喧騒が、一層大きくなったような気がした。

岳の声は虚しくも、風に乘った喧騒に掻き消されてしまつて。

夕日はどんどん、沈んでいった。

外は薄闇に覆われていた。

入ってくる風は涼しすぎていて。そのため窓を閉めてから、もう結構な時間が経っているように思える。

綾子が帰ってからのというもの、二人は無駄にテンションを上げて話していた。学校のこと、部活のこと、最近あったこと、つまらなかったこと。そんな些細な話を、窓を閉めたのと同じくらい、長い間話していた。

外からは、遠く聞こえるクラクションの音が入ってくる。

夕飯まであと何分だろうか。などと、岳は無駄なことを頭の片隅で考え始めていた。

「そうだ。頼まれていたこと、ちゃんと調べておいたぞ」

「なんだっけ？」

「柚莉ちゃんのことだよ。もう忘れたのか？」

勇一は眉根を寄せながら、岳の顔をまじまじと見た。凶星だったから言い返せない岳は、言葉を濁すと気まずそうに視線を泳がせていた。

しばらくじとーつと岳を見ていたが、まあいいかと言うと、勇一は一つ息を吐き出した。

「クラスは三組だって。俺たちは二組だから、ちょうど隣だな。で、入学式とテストの日には来たみたいだけど、三日目からはもう休みに入っていたってさ。元々身体はあまり丈夫じゃないらしくってね。で、二日目はテストの途中で気分が悪くなって保健室に行ったらしい。けど、その時はすぐに戻ってきたってよ」

「……そっか」

二日しか来ていないんだ。それなら確かに、隣のクラスでも面識がないわけだ。合点がいく。最低でも一週間はクラスの友達探りで精一杯な時期なのだ。無論岳もそうだったので、仕方がないと言ってしまえば仕方がないことなのだ。でも……。

岳はまるで自分のことのように、心を沈ませた。

勇一は急に黙り込んだ岳に、ただ見守るかのような眼差しを向けていた。

昔からそうなのだ。岳が沈めば、勇一が何も言わずに見守って。

勇一が沈めば、逆に岳が何も言わずに見守るのだ。

年が変われども、自然と変わらない二人の関係。

暗黙の了解とでも言うのだろうか。

勇一はただ、岳を見守っていた。

岳が納得するまでの、少しの間だけ――

誰かが廊下を歩き、通り過ぎていった。

蛍光灯は、人工的な白光を二人に向かって容赦なく浴びせてくる。密室の中はやけに静かで静かで。

ブンという蛍光灯の唸り声が聞こえた。

白いカーテンはその身体を休ませている。

勇一はゆつくりと大きく、空気を吐き出した。

「大変だったんだからな、これだけ聞いてくるの。野球部に一人しか三組の奴がいなくってさ」

「あー、悪い悪い。面倒なこと頼んじまってさ」

普段のテンションに戻った岳は、謝りながらも勇一を小突いた。痛いってのと、勇一は小さく漏らした。

「じゃ。弟と妹が待っているからこの辺で」

「おう。サンキューな」

カタンと椅子を鳴らして、勇一は立ち上がった。

「マジで大人しくしてろよ。ピッチャーがいないと女房役は受けるボールもないんだから」

「わーってるって。大人しく且つ早く治すように頑張るよ」

鞆を肩にかけている勇一を見ながら、岳は苦笑混じりに返した。

「じゃあな」

「おう」

「また明日」

「おう」

「早く治せよ」

「お、おう」

忙しない言葉の掛け合い。

来た時みたいに、ドアはガラツと開いては閉まって。

廊下を歩いていく音が、しだいに遠退いていつて。

「あー……」

病室は一気に静かになった。

就寝まで、あと二時間ちょっと。

つまらない時間は、今日も長くなりそうだ。

四章（2）

3

あまりにもおかしかった。

いいことだといえ、いいことなのだが。あまりにも異常すぎていて。

当初、助からないと言われていたはずの少年——上岡岳^{かみおかたけ}は、今や元気になっている。

そして目覚めてからたったの一週間で、ほとんどの怪我が完治していた。

半年は入院することになるだろうと言われていたのにもかかわらず、だ。今となってはすぐにも退院できるほどにまで、回復してきている。

異常だった。何もかもが、異常すぎていた。

ここまでくると、奇蹟なんてどうでもよくなっていた。

それ以上に彼が、最早恐ろしくさえ思っていた。

控えめなノック音がした。

「岳くん、今平気？」

するとドアが開いていく。

すると柚莉^{ゆり}はひよこつと顔を覗かせて、岳の姿を窺い見ている。

「ああ、大丈夫。暇だよ」

「よかったあ！」

点滴のパックを吊るしながら、柚莉はトントンと弾むような足取りで岳の病室に入ってきた。その姿は、まるで小鳥のようだった。

「おはよ」

「おはよう、岳くん」

柚莉が岳の病室を訪れるのは、最早習慣化していた。朝食も検温も、回診も終わって。すると柚莉は、至極当然とでもいうように、岳の病室に向かっているのだ。始めこそはおどおどしていたものの、二日目には既に打ち解けていて。それに元々二人の病室は二個隣だから、それほど距離もない。打ち解けていてしかも病室が近くともなれば、訪ねることも当たり前というべきだろう。そんなこんなで、二人は毎日朝っぱらから談話をしているのだった。

メールで繋がっていた時よりも、もつともつと。

学校のこととか、病院のこととか。

天気のこととか、自分のこととか。

いろんなことを話した。どうでもいいことも話していた。

好きなものは？ 嫌いなものは？

将来の夢は？ 今したいことは？

今日は雨だね。もうすぐ晴れるよ――

二人にとってこの時間は、何よりもかけがえのないものと化していたのだ。

続かないから続けたい。それくらいに、大切に思っていたのだ。だがその反面、幸せな時間はいくらでもあるんだと感じていた。

二人でいるこの時間は、無限なんだとも感じていた。

きつといつかは退院してしまう。無限なんて、そんなものはない。……常では解つていても、二人でいる時は違った。そんな解りきつたことでさえも、頭からはすっぱりと抜け落ちてしまうのだ。

幸せになると、先が一気に見えなくなってしまつて。

だから、一日二日じゃなくて、一週間二週間じゃなくて。何ヶ月も何ヶ月も。もしくは、何年も――。ありえないと解つていても、こういう時間が流れていくのだと信じていたのだ。そう思わずにはいられなかったのだ。

何もかもが矛盾していると。そう解つていても。

その想いを变えることなど、とうにできなくなっていた。
もうこの気持ちは、止められなくなっていたのだ。

動き出した時間がもう巻き戻らないのと、同じように。
あとはひたすらに、突き進む一方となっていた。

柔らかな陽光は地上を優しく包み込む。

穏やかな風が宙を舞い、都会の喧騒は心地良い歌声となって、窓から流れてきた。

柚莉は他愛もない話で、その顔をほころばせていた。

そんな柚莉を見ると、岳の顔も、自然とほころんでいた。
柔らかな二人の表情。

発せられる言の葉は、春の陽射しのように暖かくて。

そのどれもが、二人の笑顔をさらに開花させていった。
桜の花よりも淡く。

鈴蘭の花よりも美しく。

これ以上ないくらいの笑顔で、二人は笑っていた。
温かな時間は、ゆったりと過ぎてゆく。

一つ吹いた風は、ふわりと柚莉の髪を揺らしていった。
白に統一された病室の中。

柚莉は舞い降りてきた、一人の天使のようだった。

岳は思わず柚莉に見とれて。

柚莉は照れくさそうに、岳をつついた。

ハッと我に帰った岳は頬を薄く紅に染めて。
照れ隠しに小さく笑っていた。

幸せそうに、笑っていた。

何よりも幸せな、この時間の中で――

そして、共に座ったベッドの隅では。

ほどよく日に焼けた岳の手と、白く小さい柚莉の手が。
ちよつとただだが重なっていた。

五章 動き出した歯車

「え……？」

真正面には、主治医と鈴子りんこが立っていた。

岳たけは状況が把握できなくて、思わず聞き返してしまった。

「だから上岡かみおかくんの怪我は、もう完治しているんだよ。予定の既往よりも、ずっと早くにね」

主治医は意味ありげに、その言葉一つひとつを紡いでいった。

その中には明らかな恐怖が込められている。まるで未知なる生物にでも、遭遇したかのような。

開いた窓から入り込んだ風が、岳と主治医との間に見えない線を引いていった。

そして尾も引かずに、あまりにも潔く消えてしまう。

「よって、上岡くんは明後日にも退院できそうだ。おめでとう」

主治医はにこやかに――しかし恐ろしげな表情を浮かべると、それを岳に向けてた。

真っ白になった岳は、ただ呆然とその言葉の意味を探ろうとしていた。

けれど探れば探るほど、突きつけられた現実はやをむく。

我を保つにはあまりにも大きな衝撃が、胸の奥底で暴れていた。

左胸がまるで驚つかみされたように、ひととき大きな痛みを知らせてくる。

嘘だと思った。ありえないと思った。

岳は主治医の言葉が、全てあべこべなんだと思った。そう信じ込もうともがいた。

だから鈴子に、助けを求めて視線を向けた。誰でもいい。このことを否定してくれる人が、欲しかったのだ。

これは嘘だよ。

まだ幸せな日常は続いていくんだ。

ただそれだけの、証明が。

けれど鈴子はいたって真面目な表情を浮かべて、主治医の隣にたたずんでいる。つまり、そういうことなのだ。

「……うそ、だろ……」

思わず漏れた言葉は、呆気なく空気に飲み込まれてしまう。

岳はその顔を絶望に染め、主治医を見やった。鈴子を見やった。でも……。

「おめでとう」

主治医はそれしか、言っではくれなかった。

岳の願いが、届くことはなかったのだ。

夕闇に染められた病室の中で、岳は一人、絶望に暮れていた。

1

眠れない夜だった。

ダークブルーの闇が辺りを包み込み、淡い月明かりが風景を照らしている。

岳は一つ、寝返りを打った。

『おめでとう』

そう言った主治医の顔が、脳裏をよぎった。

「……ッ」

ギョツと握りしめた白いシーツに、群青の皺がいくつも浮かんだ。退院のことを考えたら、急に恐ろしくなってしまったのだ。

いつかは訪れると解っていて、でもずっと続と思っていた幸せな時間に。突然終止符が打たれてしまう。柚莉ゆりと毎日会えたあの時間が、もうなくなってしまうのだ。

あまりにも唐突すぎて、でもそれが現実で。本当は喜ぶべきことなのに、岳はまったくもって嬉しいと感じることはなかった。

今までの何もかもを、奪われたような気分だった。日常が破壊されていくかのような、そんな気分だった。

「……………ふざけんじゃねえよ……………」

小さな声は、虚しく大きく響いた。

岳はさらに強く、シーツを握りしめる。

指の先が、ちよつとだけ痛くなつた。

2

へこへこと頭を下げて、病院を出たのは日曜日の晴れた午後。

半年は入院するだろうと言われていた岳は、結局たったの三週間で退院したのだった。

普通に考えればありえない速さでの退院に、誰もが驚いていた。

勿論岳自身も驚いていた。

そしてその多くの者が、岳を恐ろしがった。

だがその中でも、柚莉は温かく送ってくれたのだ。

早く治つてよかったね、と。また野球ができるんだね、と……。

最後に挨拶をしに行った時も、柚莉は笑顔でいてくれた。

「お見舞いに行くからな」

「うん」

「メールもするからな」

「うん」

「柚莉も早く元気になれよ」

「うん」

岳が言葉を言つたたびに、柚莉は大きくうんと頷いてくれた。何度も何度も頷いてくれた。

それだけが心の支えだった。

ここから離れても、柚莉はずっと待っていてくれる。

勝手にそんなことを思つて、でも否定はせずに。岳は病院を出ていったのだった。

柚莉は最後まで、笑っていてくれた。

家に帰ると、何だか懐かしい気分に駆られた。
三週間が経っているというのに、何一つとして自分の部屋は変わっていないのだ。

使っていないのだから当たり前なんだろうけど。手を付けていないのだから当然なのだろうけど。

窓際にあるベッドも、その脇にある机も。反対側に構えるタンスも本棚も、本当に何にも変わっていないのだ。まるでここだけ、時間が止まっていたかのように。

何だか妙に、不思議な気持ちだった。

今まで自分の身に起きていたことが、まるで幻だったかのように思えた。本当はまだ、入学して間もない、あの平和な日ではないかとも思えた。

だが、時は確実に過ぎていた。

立ち込める空気は四月の桜色ではなく、もう五月の緑が色濃く感じられるようになってきている。肌寒かった空気も、今は本当に暖かくて。

岳はぐると自室を見渡した。

そこは眩暈がするくらい、何にも変わってはいなかった。

3

「そろそろ……かな」

死神の青年は頼杖をつきながら、楽しそうに笑んでいた。

彼の背後には死神の、あの少年が立っている。静かに立ち尽くすその姿はやはりまだあどけなかった。だがその表情には、多少の翳りが浮かんでいるのだ。悲しい、翳りが。

闇に覆われた冥府の中。青年の声だけが大きく聞こえていた。

「運命は動き出したんだよ。もう……止まることができないくらいにね」

子供のようにどこまでも楽しそうな声は、闇の中へと消え入った。ふふつと小さな微笑が闇に生まれる。青年が軽快に振り返ると、長い闇色の髪がふわりと舞い上がった。

「拓也、もう時間だよ」

笑んだ瞳は――

「君たちは共に歩むんだ。先の見えない運命をね」

――鋭い光を発していて。

「はい」

青年の背後で少年――拓也は動いた。

背丈よりも悠に長い鈍色の大鎌を、その背に揺らめかせながら。重々しい空気を、その切っ先で切り裂きながら。

拓也はゆっくりと頭を持ち上げる。

最果てまで続く闇の中。

翳りのある表情を浮かべながら、拓也の双眸は何かを見据えていた。

五章 (2)

「おきんしゃーい、岳たけるくーん」

岳は眠っていた。

外は闇色に染まっていて、上空には蒼い月が浮かんでいる。

瞬く星々は光に紛れて見えにくい、そこは確かに夜だった。

「いい加減にしないと、遅刻すつぞー。廊下に立たされるぞー」

「……んっ、う………」

誰かにゆさゆさと揺らされ、岳は思わず身じろぎをした。

だが、同時に漏れた吐息は、まだ夢の中の証である。もぞもぞと動いて。それから岳は、再び健やかな寝息を立て始めていた。

「お願い、起きて。俺疲れるから」

あー、もうー。と言う声は、少年のもの。

岳は再び身をよじると、薄っすらとその双眸を開いたのだった。

「……………あ……？」

しょぼしょぼとした瞳は、まだ虚ろだ。焦点がなかなか定まらないでいる。

間が抜けた声は、闇の中へ消え入った。

「あ。目が覚めた？」

「……………はア？」

眠くて眠くてたまらない。といった風の岳は、明らかに且つあからさまに、かつたるそうな表情をその顔に浮かべていた。

岳はのっそりと起き上がると、声のするほうへと顔を向けて……。

「……………」

岳は眠気眼をこすった。ぐしぐしとこすった。目が覚めるくらいにこすった。

それから再度、視線をやって。

「こんばーんは。二度目ましてー」

「……………誰だ？ テメエ……………」

明らかに身内じゃないのは確かだ。こんなハイテンションで髪の毛長い奴、見たこともねえ。

岳はおもいつきり眉根を寄せて、少年を見やった。

年の頃は、岳と同じくらいだろうか、それとも少し上か。

「覚えていないのー？ うっわー、ショックだー」

だが少年は飽く迄もそのキャラを通そうとしているらしい。テンションはまったくもって、下がる気配を感じさせない。それに……

「前に会ったのは、お前の本来の命日だった日だよ。岳」

「な……………」

こいつもまた、岳の名前を知っていたのだ。それに命日の日って言ったら……。

岳の中で、あの時の光景が蘇った。死神に会った、あの時の。

そして。最後に見えた、あの――

岳ははつとして、少年の姿を見やった。

この前会った時とは、纏う服装が微妙に異なっていた。あの身を包んでいたローブが、今はない。――これも、死神なのか？

少年らしい笑みを浮かべた彼は、襟に白いラインの入っている漆黒のノースリーブに、同色の腕貫のような物をしている。オフホワイトのジーンズは長く、先には栗色のブーツが見えていた。

そして首からは、碧色の十字架が複雑に絡み合った二本の鎖で吊るされている。その背後には、彼の背丈をも悠に越える鈍色の大鎌が、二重螺旋の鎖で吊るされているのだ。……あまりにも、ギャップが大きすぎていた。

少年はいひひと、悪戯っぽく笑った。

浮かんでいるのは、どこまでも少年らしい笑顔で。

「島原拓也しまはらたくやだよ。死神の、ね」

拓也はこともなげに、そう告げた。

周囲は闇に、包み込まれていた。

死神。

それは死をつかさどる、冥府の番人とされている存在だ。タロットなどでも不吉さは相も変わらず、その数字は十三。カードが意味するは『永久運動・死・絶望・破壊』等といった否定面。そして『創造・積極性』等といった肯定面。

そして現代でもその姿は同一で、大きな鎌を持つ、黒装束の髑髏という印象を深く刻み込んでいる。それが、死神なのだ。

だが、岳が今まで会ってきた奴らは、とても死神とは思えなかった。……とくに、ここにいる拓也という少年は。

何もかもが、違いすぎているのだ。

根強く印象付いている髑髏でもなく、人の命を容易く持つていくような見た目でもない。あの青年には多少の恐怖を感じたが、拓也はまったくそれを感じさせない。その身包みを全て今風に変えれば、人柄のいい少年にでも十分に見られるはずだ。

それなのに彼も死神なのか――？

信じられない思いがいっぱいで、岳は拓也から視線を放すことができなかった。

暗い夜闇を、淡い月明かりが照らしている。その中で拓也は蒼く淡く染まっていた。

幻想的であって、戦慄を覚える光景だった。

拓也の髪が、はらりと揺れた。

「まあ、そんな目で俺を見るなつて。いたって普通な方だよ、俺」
一步一步と歩み寄った拓也は、岳の前まで来ると、大鎌をその手に取った。生々しい光が、月明かりを交えて岳の目に飛び込んでくる。

眼前に立つ拓也の表情は、穏やかそのものだった。

岳は左胸の奥に、鋭い痛みを感じた。

痛みは息が詰まるほど苦しくて。

背筋には一筋、汗が伝った。

「く……ッ」

抵抗など、できるはずもなかった。下についた手は汗をかき、彷徨った末にシーツを掴んでいて。強く握ったためか、それは皺を増やしていくばかりだった。

喉から漏れた声が、緊迫した夜闇を振るわせた。

拓也はにこりと笑っている。

そして持っていた大鎌を前に出すと、それをゆっくり……床に置いたのだ。

コトンと、冷たい音がした。

それからまた一步と前に進み、拓也は膝立ちになる。視線の位置が頭一つ分、低くなった。岳が視線を下にやると、拓也は愛嬌のある笑顔を岳に向けていた。

だが岳の気持ちは荒れ狂う一方だ。

正気じゃない。

そう感じずにはいらなかったのだ。

「な、怖かった？ 切られると思った？」

拓也はこの場に似合わない声を発すると、岳の足を軽く叩いた。日常にありふれている動作さえもが、非日常的に見えてくる。

拓也のまるで邪気のない声が、この狭い空間で反響した。

「でもさー、俺が岳を切るわけないじゃん。ちよつとは気付けつての」

それに岳の怪我を早く完治させてやったの、俺なのに……。と、拓也は拗ねた素振りを見せて、小さく呟いた。

「え、お前……」

岳は思わず、無作法にも拓也をまじまじと見てしまった。だってこいつは死神じゃ……。

「お前が寝ている間、ずっとずーっと力使ってたの」
疲れちったんだぞ。

そう言つと、拓也は岳の足をつんつんつんと突きまくった。岳はありえないとも言いたげに、拓也を見つめるばかりで。

「……もしかして、信じてもらえてない？」

眉根を顰めながら、拓也は岳をじっと見て。

心外だあー！ と叫んだ。が、一体どう気付けばいいというのだらう。

……それとも、これもあの青年が言っていた「勘違い」の一つなのだろうか。

岳は恐怖に震える瞳を、拓也に向けた。

拓也はそんな岳を見て、口端を上げた。

「岳ちゃんも喋れよー。俺だけ一方通行つても寂しいじゃんか。せっかく今日からお仲間さんなんだからさ、テンションあげあげで行きましようよー」

「仲、間……って」

一体どういう意味だよ。

岳は思わず叫びたくなつて。でも、口はまともに動いてはくれなかった。

中途半端に紡いだ言の葉は、それからまったく続きやしなかった。サファイアのように澄んだ輝きを見せる、拓也の双眸。月明かりに照らされると、それは一層の輝きを増した。

「暗城さんあんじょうさんから聞いてるでしょ？」

「誰だよ。その、暗城って奴は……」

岳は声を低くして、拓也を凍える瞳で睨みつけた。

「うそッ！ 岳ちゃんって暗城さん知らないの？」

それでも拓也は動じやしない。マイペースのままに、驚く素振りを見せていた。

岳は訝しそうに、目を細めた。

尤も、知っていたら聞くことはないのだ。嘘であるはずがない。「会ったでしょ、あの日。冥界との狭間でずっと話してたじゃん」

拓也は淡々と話を進めていく。

あの日とは、つまるところ事故に遭った時だろうか？ だとしたらそれは——あの人形のごとき美麗さを持った青年のことなのか？

疑問ばかりが岳の脳内を埋め尽くした。

でも、仲間になるようなことを彼は言っていただろうか？

そもそもにして、何でこんな奴と仲間にならなければ――？

考えれば考えるほどに、わけが解らなくなってくる。

「まあ、理屈も何もいらないでしょ。そんなこと」

拓也の瞳が、微かに揺れた。

「岳は死神になるんだよ。それだけは言い切れる、真実なんだから」
「待てよ！！ 死神って何のことだよ！ 俺はそんなこと一言も聞いてねえぞ」

悲痛に荒いだ声は空気を弛緩させた。

「そんなはずはないさ。岳は暗城さんから聞いているはずだよ。」
罪を償わなきゃいけない』ってことを」

飽く迄も冷静な声音。

岳の背筋に悪寒が走った。

……まただ。

「何なんだよ。……その、罪ってやつは」

闇はどこまでも続いている。

まるで連鎖を繰り返しているかのように。

拓也の双眸に、翳が射す。

それでも口元だけは、笑みを崩すまいとしていた。

「……大罪だよ。俺のも岳のも、ね」

長い拓也の髪が、さらりと音をたてた。

淡い光に照らされるそれは、絹糸のように思えた。

「ねえ。……岳はさ、何で死神がいるか知っている？」

今までとは違う、穏やかな声。

岳は無言で、否定を示した。

拓也は軽く、瞼を閉じた。

「死神ってのはな、ようは罪なんだよ。前世に犯した罪を償うためのな」

「だからその罪って……何なんだよ」

殺しか？ 岳は自信なさげに呟いた。

それもあるよ。拓也は肯定した。

「……でもね、それ以外の理由もあるんだ」

ちゃんとした罪の形が、記憶の奥底で眠っているからね。

月明かりが、微かに揺れる。

窓のずっと遠くで、クラクションの響いた音がした。

岳は拓也から、目が離せなくなっていた。

拓也がこれ以上ないくらいに、痛そうな表情をしていたから……。

「岳はね、墮天使だったんだ。この世界を滅ぼそうと企んだ、最強最悪の墮天使・アレクトス。……彼は非道な奴だった。その強大な力を持って国を壊し、封ざれる五世紀余りの間で十数億という命の灯火が消えたんだ」

遠い目。射し込む月明かりは、拓也の瞳で輝いていた。

「俺は天使だった。名もなき天使だったんだ。天使はね、ある日掟を破ってしまった……そのせいで、一国があつという間に滅びたんだよ」

拓也はきゅつと唇を引き結ぶ。

「俺たちは決して許されないことをした。解るだろう？ 規模が桁違いの大罪だ。だから人の死を見ることが、人の命の儚さ尊さを、その胸に刻み込まなきゃいけないんだ」

時を越えた罪なんだよ、きつと……。

拓也の瞳の奥で、輝く月明かりはゆらりと揺れた。

まるで湖面にでも映っているかのように儚げに。

岳は鈍る身体を起き上がらせた。

「……何で、解るんだよ。俺が墮天使だったとか、お前が天使だったとか」

「それは、解るからさ」

「だから何で解るんだよ。前世なんて、何の証拠もないじゃないか」

拓也はすうつと笑った。

「信じたくない？」

「当たり前だ。誰かを殺しただなんて、信じたくもない」
声は、どうしても詰まってしまう。

「でもね、真実だよ。紛れもない真実なんだ」
しかし拓也は、それを否定などしてはくれなかった。

否定などしなかったが、その顔にはやはり、悲しい翳りが浮かび続けている。まるで迷子になった子供のような。そんな哀愁を漂わせていた。

「それを証明するものって、あるんだよ。ただ気付かないだけでね」
拓也はよいしょと立ち上がると、岳の座るベッドに腰掛けた。拓也の体重の分だけ、マットは沈んだ。

岳からは拓也の背中しか、見えなかった。

「例えばそうだねえ。岳は実技教科が得意だよ。体育とか音楽とか美術とか、……あとは家庭科なんかもあったか。勿論それらが得意なのは大いに結構だよ。でも、それが行き過ぎているとは思わなかった？」

「行き、過ぎ……？」

「そう、行き過ぎ。岳はね、それらがずば抜けていいんだ。野球なんかは今でさえプロ並み。音楽だって合唱も合奏も得意でしょ？」
足をふらふらさせながら、拓也は言っている。

「それがどうしたって言うんだよ」
ただ得意なだけじゃないのか？ それが一体なんだって言うんだよ。

恐怖だけが積み続け、岳は思わず拓也の言葉を遮ってしまった。
微かな静寂が、室内を包み込む。

「それがね、前世の影響。受け継がれし力なんだ」
拓也は振り向き、そう告げた。

困ったような微笑が、どこか力なく浮かべられている。

「アレクトスは頭のいい奴ではなかったらしいんだ。でもね、どうすれば人間が不信感を抱かないのかっていうことは知っていたんだ。今もそうでしょ？ 人間って何か才能がある人には不信感を抱きや

しない。……彼はそこに漬け込んだんだ。幸か不幸か、彼には芸術面での才能があつてね。歌も上手ければ絵も上手い。勿論体力だつてあつた」

それがどういふ結果を招いたかは、岳も解っているはずさ。

拓也はそう言つと、再び前を向いてしまった。

「今まで岳はその才能を遺伝的なものと思つていたかもしれない。でもそれは、遺伝なんかじゃないんだ。遺伝的なものだったら、両親もすごい才能とか持つてなきゃでしょ？」

拓也の言葉に、岳は拳を握りしめた。

「納得いかねえよ」

その声は、本当に苦々しそうだった。

「だって野球は別としてもだ。音楽は親が楽団に入っているから、小さい時から慣れ親しんでいたんだ。小さい時からやっていれば、誰だつて上手く……」

「ならないよ。なるわけがない」

拓也は振り返ると、岳を見据えてきた。

その双眸には、冷たい炎が燃え盛っているようで。

「だったら努力しても上達しない子はどうなるの？ 小さい時からやっていても、上手くならない子だつているんだよ。それをどう証明するわけ？」

岳はその言葉に、思わず身の毛がよだった。

会つて間もないのにこんなことを思うのもどうかと思う。

だが初めて拓也のことが、怖いと感じた。

恐ろしいと、感じた。

静かな空気が張り詰める。

拓也はこれ以上何も言わなかった。

そつと瞼を伏せ、立ち上がった。

ベッドはやつぱり、軋んだ悲鳴をあげた。

「……もついいよ。これからどう足掻いたつて、俺たちは死神に変わりはない」

鈍色に輝く大鎌を手にとると、拓也はそれを悲哀に満ちた瞳で見続けていた。

「ただ、これだけは確実に言えるよ」

拓也は、その視線を岳に向けた。

その瞳はこれからの運命でも見せられるかのようで。

「覚悟はしておいたほうがいい。もう岳は、逃げることもさえできないんだから」

俺たちはもう、囚われの身なんだ。

外は相も変わらず穏やかで。

瞬く星明かりの中、月が輝いていた。

下方で聞こえる都会の騒音はどこか遠く。

拓也の呟きは異様な空気の中へと飲み込まれていった。

鈍色の大鎌は。

拓也の手元で月明かりを湛えて、輝いていた。

六章 風下の一輪花

何が起こっても、日常は変わることなどなかった。

たった一人の存在で、世界なんて変わるわけがない。

そんなことは解り切っていた。

夜が終われば朝が来る。

人は起きだし動き出す。

学生は学校へ、サラリーマンは会社へ。

それぞれ行く場所へ行つて、やることをやって。

当たり前だと思っていた。

いや、これは当たり前なんだ。

それなのに、当たり前が不自然に感じた。

自分の周りだけが変わっていくことに、ただならぬ不安を感じた。

それでもやっぱり日常は変わらなくて。

急に不安になって。

でも何の足しにもならなくて……。

置いて行かれたような不安感が、止め処なく襲いかかってくる。

今この瞬間も。

次に待つ、その瞬間も。

ずっと、ずっと。

1

久々に行つた学校は、随分と変わっていた。

四月の間に友達関係はすっかりできあがっていたようで、教室に入つた瞬間は本当に居心地が悪かったのだ。ちよつと取り残されたような、微妙な雰囲気が漂っていた。

だがそれも最初のうちだけだった。

和気藹々としたクラスだったためか、放課後になる頃にはもう多くのクラスメイトと岳は打ち解けあっていた。最初の居心地の悪さも不安も、とうに吹き飛ばされていたのだ。

部活も部活で、再度手荒い歓迎をされては以前と変わらぬ練習をして。

確かにここには岳の居場所があつたのだ。

そしてここが、岳の居場所だったのだ。

何の変化もない、この場所が。

ただその中で一つだけ、変わったことがあつた。

それは帰り際に寄る、柚莉の病室。

約束したとおり、岳は柚莉のお見舞いに行っていたのだ。たまに部活が遅くなっていけないこともあつたけど。その日以外は、毎日毎日。

柚莉の笑顔が見たくて。

柚莉の声が聞きたくて。

柚莉に会いたくて、岳は病室に足を運び続けていた。

変わったといっても、それは岳にとってとても幸せなことだったから。

外は青空に包み込まれていた。

春の陽気は穏やかで、吹き抜ける風も温かい。

太陽が天高く昇る中、学校では一日で最も活気の溢れる時間へと突入していた。いろんな所からお弁当のにおいが、生徒の話し声が漂ってくる。

そんな学校の階段を一段、また一段と彼らはのぼっていった。

照らす陽光が一際近く感じられる。

岳たちは誰もいない屋上を、堂々と占拠していた。

「さーて、今日のおかずは何でしょう！」

などと勝手にハイテンションなのは、クラスのムードメーカーで

部活仲間の青山陽太である。共にいた勇一と綾子も、つられて何だろう何だろうと言いつつ出した。

だが調理が当番制なのが上岡家。岳は今週運悪く朝食当番だったため、何だろうと言わずとも中身は知れている。この話に乗れないのが、ちよつとばかり残念に感じてしまった。

「おおーう。岳のいいなー、卵焼き。一個ちよつだいな」
「嫌だね」

ひよこつと覗き込んできた陽太に、岳は構わず否定した。

「ケちゃんぽ！ いいじゃん一個くらいさー」

「お前の弁当にも入っているだろう。卵焼きはさあ」

言いながら、岳は陽太の弁当箱にちまつと居座っている、黄色い卵焼きを指差した。

見目にはそれほど大差はない。いたって普通の卵焼きだった。
…が、

「俺の冷食だもん。岳の手作りだろ」

くわつと陽太は喰いかからんばかりの勢いで、意義あり！ と叫んだ。

正面で、勇一と綾子が苦笑している。

「味なんて変わんねえよ」

「いいや、変わるね！ 卵焼きと肉じゃがは、家庭それぞれの味が出るんだ！」

「知らねえよ、んなこと」

「うわー、知らねえのかよ。バーカバーカ！」

「馬鹿さ加減はお前と大差ねえしー。それに馬鹿って言ったほうが馬鹿なんだよ、バーカ！」

「お前が馬鹿って言ったんだろ、バーカ！」

岳と陽太はバーカバーカと言いつつ合った。

青い空に、二人の声が響き続ける。

バーカバーカ……

五十歩百歩。

どんぐりの背比べ。

馬鹿って言ったほうが馬鹿なら、二人とも言っているのだ。理屈的には、どちらも馬鹿だ。

とはいえ勿論、二人ともそれにはまったく気付いていない。

バーカバーカ……

平和なのか、それとも単に馬鹿なのか。

勇一と綾子は、呆れながらも笑っていた。

バーカバーカ……

バーカバーカ……

二人の声は、どこまでもどこまでも響き続けている。

これが確かに、岳の日常だった。

何の変哲もない、これが。

2

「ごめん、遅れた」

ひらひらと手を振りながら、岳は柚莉の病室に足を踏み入れた。

今は部活も終わって、家路をたどる途中。岳からは達成感に似たものがきらきらと滲み出ていた。

「お疲れさま」

柚莉はそう言うと言っていた本を閉じ。小鳥のようにぴよぴよこと、岳のほうへと近づいていく。

身体に障るぞと苦笑しながら、でも嬉しそうに岳は言った。解つてると、柚莉も嬉しそうに言った。

「今日も部活、大変だったんだね」

「まあ、甲子園の予選も近づいてきたしね」

「ほっぺに泥ついてるよ」

「え……。うそ」

「ほんと」

気付かなかったの？ と柚莉は笑顔のままに言ってきた。

全然気がつかなかった！。岳はそう言いながら頬をこすった。確かにちよつと、ざらざらとした土の感触がある。強くこすったら、そこがひりひりと痛んだ。

柚莉はえへへと嬉しそうに顔をほころばせながら、岳を見ていた。

「ベースに飛び込んだの？」

「んー……。そういえば飛び込んだ、かも」

「きつとその時だね。ついちゃったの」

柚莉はいつの間にか、野球のことを覚えていた。

最初はやっぱり女の子だから、野球のことなんてこれっぽっちも知らなかった。けれど話していくうちに、会っていくうちに。だんだんと話せるようになっていったのだ。

最近では柚莉のほうから、岳に野球のことを話しかけてくるくらいだった。

落ちた？ と岳は柚莉に頬を見せた。

赤くなってるけどね。と柚莉は答えた。

「どうしよう、みっともないかも」

「そんなことないよ。大丈夫」

「えー。でもさあ……」

「気になっちゃう？」

「うーん……。どうにも気になる」

岳は頬をちゃんと触った。こすった箇所は、微かに熱を帯びている。

何だか最近、岳は柚莉の前だとどうしても、些細なことまで気になつてしまうのだった。

例えば身だしなみは平気かなとか。変な表情になってないかなとか。ちゃんと男らしくいられてるかなとか――。

ちよつとでも変だと、どうしても恥ずかしくなる。

今までそんなことは一度もなかったのに。どうしてもどうしても恥ずかしくて。

なんか変だな。

でも何が変なんだ？

自分の変化なのに何も解らなくて、岳は頭を悩ませていた。ちよつとした柚莉の言葉でころころと変わる心情も。

それに合わせて変わる、表情も。

ちよつとしたことで気になって。

ちよつとしたことで嬉しくって。

何でこんなに変わってしまうんだろう？

何で柚莉といるだけで、こんなに楽しいんだろう？

この時だけは本当に柚莉のことしか考えられなくなるんだ。

学校のこととか部活のこととか。死神になるっていうことだってあるのに。

そんなことなど、もうどうでもよくなってくるんだ。

ちつぽけに思えてくるんだ。

「大丈夫。岳くんオトコ前だよ」

目の前で、柚莉はそう言ってくれる。

「え。ホント？」

「ほんとほんと。すっごいオトコ前」

はしゃいだ岳に、柚莉は何度も「オトコ前」と言ってくれた。

お世辞だと解っていても、岳にはその言葉が嬉しくって。

身体の底から、火照ってくるみたいだった。

嬉しくて嬉しくて、心臓は聞こえそうになるくらい高鳴る。

えへへと照れくさそうに、岳は笑った。

柚莉も楽しそうに、えへへと笑った。

もう柚莉といられればそれだけでよかった。

そう思っただけでよかった。

窓の外は夕焼けに染まっている。

岳は喜びの絶頂の中、思わず頭を二・三掻いた。

春の陽気よりも、そこは暖かった。

七章 流れ星に願いを

変わらない日が続けばいい。

そう思っていた。

そう、願いつけていた。

毎日が幸せの中に包まれていて。

その中で生きていつて――

それが最良の道だと思っていた。

でも、日常なんてそう上手くはいかないんだ。

嬉しさが倍になる日もあれば。

どん底に突き落とされる日だってある。

それが積み重なって日常だったのに。

その時の岳^{たける}には、そんなことなど知る由もなかった。

毎日がこの幸せに包み込まれている。

それが当たり前なんだと。

そう感じずにはいられなくて……。

日常はいつかクロスする。

岳はその手前まで、もう来ていたのだった。

日常との、交差点の――

1

久々に、部活のない平日だった。

だから柚莉^{ゆり}の元にも早く行けて、その分いろんなことを話して。

また明日ねと笑顔を見せあつて、病院を出て……。

それでもまだ、空は青いままだった。

ちよつとだけ、もったいないような気がした。

もうちよつとだけ話してくればなと思った。

けれどまた病室に戻るのも躊躇^{ちゅうそ}われて、一度振り返ってから岳は

再び歩き出した。

一歩踏み出せば、そこはもう都会そのもの。

排ガスにまみれた空気。

屯う人々を掻き分けて。

今日も東京は賑やかで。

その中を岳は一人、家路をたどった。

途中幾人か、同じ高校の人にも会った。

会ったとは言葉だけで、本当はただ見かけたただけなのだが。

それでも。いつもならあまり見ないような光景だったのだ。

いつもはもつと、遅い時間に帰るから。

なんか妙に新鮮だった。

少し、心がはしゃいだ。どこか寄り道をしてみたいようにも思えた。

岳はビル群を、そつと仰いだ。注ぐ陽光が目眩しい。

胸はさらに高鳴り、けれど――

何もしていないのに、岳の身体は何故かどつと疲れが押し寄せてきていた。

いつもと違うからだろうか？

些細な変化が、岳の身体を狂わせたのだろうか？

ただ、部活がない。たったそれだけの変化が、どうにもこうにもおかしかった。

普段よりもずつと楽なはずだが、普段よりもずつと疲れていた。

揺らめく春の空気。

脳内は鮮明なはずなのに、何故かぼーっとしていた。

気分は楽なのに、身体は何故か疲れきっていて……。

変な気分だった。

何だか妙に、変な気分だったんだ。

……帰ろう。今日くらいは大人しくしていよう。

大量に降り注ぐ、春の光。

岳は仰いだ視線を元に戻し、人に溢れた通りを突き進んでいった。

家まであと、もう少しだ。

それから岳は家に帰るなり、自室に、寢床に、直行した。荷物をその手から放し。

身体は全て、寢床に預けて。

誰もいない自宅の、自分しかない自室の中で。

制服にしわがつくことさえ気にも留めずに、岳はそのまま瞼を伏せた。

穏やかな暗闇が眼前に広がる中。

一瞬何もかもを鮮明に感じ取っていて。

そして間もなく、岳は規則的に胸を上下させ始めた。

一粒の明かりもない冥府で、何かが動こうとしていた。

それは多くの者にとっては些細なことだ。

一人の者にとっては、この上なく耐えがたいことが。

この暗黒に包み込まれた地で。

確かに、動こうとしていたのだ。

「たくや拓也。あんじょうちよつと来なさい」

暗城は手招きをすると、拓也を傍まで来させた。拓也の足取りはしつかりとしているがどこか重たそうで、その面立ちには憂いさえ感じられる。

黒いローブの裾が、はらりと翻った。

「なんですか」

「仕事だよ。岳くんのね」

拓也の精悍な瞳が、僅かな揺らぎを見せた。

その傍らで、暗城は薄っすらと笑みさえ浮かべている。

「……また、やるんですか」

消え入らんばかりの小さな声で、拓也はそう言った。それからぎゅっと、唇を噛み締める。

暗城はそんな拓也の肩に手を乗せると、そつと何度か叩いた。

「今更なことに、そんな悲しい顔をするんじゃないよ。拓也も一度は通った道でしょ？ …… だったらその理由くらい、解っているはずだ。違ukai？」

「違いますよ。解りきつたことです。でも——ッ！」

それが最善の方法なのか？

それに一体、何の得があるというのだ？

ただ心の傷を抉るだけじゃないか。

それなのに何でそんなことを——

言葉は留まるということを知らなかった。感情が昂って、否定しなくて。

幼子を宥めるような暗城に拓也は反発しようとして……。しかし人指し指を口の前にあてがわれ、拓也はぐつと押し黙ってしまった。いとおしそくに笑顔を向けながら、暗城はその手で拓也の頭を撫でる。

「だったらいいんだよ。解っているんならそれで」

それはまるで、越えられない壁を見せつけられているようだった。悔しそくに顔を歪める拓也に、暗城はさらに頭を撫でてやる。

壁はさらに高くなって……。

「動き出した運命は、もう止められない。それがどれだけ酷なものだったとしても—— 後にはもう、戻れないんだ。たとえ待ち受けるものが、後悔でも深い傷でも。僕らはそれを受け入れなきゃいけない立場にあるんだから」

それが死神なんだよ。そう言っつて、暗城は拓也を撫でるのをやめた。

俯いたままの拓也は遣る瀬無い表情を露に、足元をずっとずっと見つめ続けていた。

静寂が辺りを包み込んでいる。

闇に渦巻く心は、未だ治まるということを知らない。

耳の奥で、キンと甲高い音がした。

不気味に鎌は、光を放って。

暗城の瞳は色を変えた。

「本日夜半に、始動する」

その声は温かくないのに、穏やかに響き渡っていく。
そして。

「岳くんは、伝えておきなさい。担当者は――」

すぐそこまで迫りこんでいた奈落に、足を捕られたかのように。
思わず折りたくなった膝を、拓也は必死に伸ばし続けた。

崩れそうになった心を、拓也は必死に取り押さえた。

そして拓也は、その掌をおもいきり握り込んでいた。

暗城の声は。

無情にも、響き続けた。

七章 (2)

2

誰かに揺さぶられて、岳はその目を覚ました。

辺りはすっかり陽が落ち、暗くなっている。カーテンが開きつばなしの窓からは、光の集合体を通りと共に見えていた。その光景はまるで、大規模な光のアートのようにも思える。

ふわとその上体を岳は上げた。と、そこには死神装束の拓也の姿があつて。

「何でお前が……」

「岳。行くぞ」

「え……？」

拓也の調子は前に会った時と、どこか違った。

……いや、それだけじゃない。

今や拓也は、笑顔の欠片さえも見せなくなっていたのだった。

ただならぬ雰囲気、岳はゾツとした。

「行くつて、どこにだよ」

「自分の格好を見て、感づけよ」

「は？」

強まる拓也の口調。

格好つて俺、今制服姿だし……。

そう思った岳は自らの纏っている物を見て、思わず引き攣った声を漏らしてしまった。

「何、だよ。これ……」

それは明らかに、制服などではない。

漆黒のローブに同様のノースリーブ。襟にある白いラインとオフホワイトのジーンズが妙に浮いた存在となっていた。

首からは複雑に絡み合った鎖を下げ、その先には碧色の十字架がある。そして枕元には……鈍色の大きな鎌が。

岳は思わず、両の掌を見た。

ほどよく焼けた岳の肌でさえ、漆黒のローブに包まれては色白く見えてしまう。岳はその手を握っては開いてを繰り返して。

……それが確かに己のものであり、現実だということを思い知ったのだった。

嘘だ……。岳は小さな声で否定した。

嘘だ、これは嘘に決まっている。質の悪い悪夢なんだ。

胸中で何度も何度も繰り返した。

だが、目が覚めることは決してない。

言葉だけが無情にも、繰り返され続けている。

嘘だ、嘘だ嘘だ！

岳は頭を抱え込んだ。

はらりと当たったローブの、布の感触が頬にした。

視界が微かに、滲んだ。

……やっぱり、現実なんだ。

「岳……」

拓也は口を開いて、それから言葉に詰まってしまう。

あまりにも岳が、いたたまれなかったのだ。

そして過去の自分とも、あまりにも似すぎていたから……。

岳は目の前で震えていた。

己の置かれた状況が受け入れられなくて。それでも真実と知ってしまった。

何もかもを否定したくて、怯え続けていた。

だからといって、ずっとこのままにいるということもできるわけがないのだ。

今日が岳の、初任務の日なのだから。

たとえそれが、幾ら嫌であろうとも……。

遠く聞こえる通りの喧騒。

蒼闇に包み込まれた部屋の中で、拓也は岳の腕をそつと引つ張つた。

されるがままに、岳は立ち上がる。

そこには、いつものような強さなど、微塵も感じることができなかった。

その姿はまるで、操り人形のようにまったく生氣がなく。

「死神の仕事は、主に三つだ」

それでも拓也は、現実を岳に突きつけた。

酷だと解つていても、それでも。

岳の唇は、微かに震えていて。言葉を発することもできなかった。ただ、拓也の瞳を見つめるばかりで。

否定してくれと懇願して。

ダークブルーの瞳が翳りを見せる。

拓也の双眸には、罪悪感の塊が浮かんでいた。

遠くの街明かりが、拓也の瞳の中で輝きを増した。

「一つは死亡の確定だ。その鎌を使って、担当者の魂を肉体から切り離す。そして死者のために詩を歌^{うた}って、御霊^{みたま}を天界へと導く。あとは……」

掴む岳の腕は力をなくしている。

拓也はその腕をひたすらに見続け。

掴む腕に、僅かに力が入った。

漆黑の中で、二つの腕が……、

「彼らのために祈り続けるんだ。安らかな永眠りにつけるよう」

助けを求め合うかのように、固く繋がりがあっていた。

呑み込むかのごとき闇の中で。

白くて未熟な彼らの腕が。

僅かな光を求めている。

外界からは、小さな音が聞こえてくる。

何かで遮られているかのようにその音はばやけていて。

それははるか遠方の出来事のように……。

岳は俯いたまま。小さくなったまま。

その場に立ち尽くしていた。

日常との交差点。

それは無情にも、岳の前に憚っていたのだった。

あと一步の所で。

さて飲み込めと。

後戻りができぬ闇を張り巡らせ。

今、ここに。

涼やかな鎖の音。

拓也はその大鎌を岳の前に差し出した。

ぬらりと光る、その鎌を突きつけるように。

しばしの静寂。

動かぬ二人。

そして岳は、その鎌を手にとった。

諦めにも似た表情が、その顔には浮かんでいた。

3

歩きたびに、鎌を吊るす鎖がしゃらんと音をたてた。

あれから岳は、拓也から多くのことを聞いたのだった。

死神としての仕事のことも。

罪の重さの関係のことも。

暗城のことも。

そして、初任務のことも。

多くのことを、拓也から聞いた。

そして岳は、一つだけ本当のことが解ったのだった。

それは暗城の言った『罪を償いきるまでは、君は囚われの身なんだから』という言葉の、本当の意味。

そもそも岳は前世——アレクトスの犯した罪の全てを、償わなければならぬのだという。そして彼が犯した罪は、他の者とは計り知れないほどの規模であった。

『殺した分だけ、苦しみなさい。そして、罪の重さを知りなさい』
これが死神の掟である。だったら岳は本当に、易々と開放されないのだろう。

だって彼が奪ったのは、十数億の命だ。
どれほどの苦しみをもって、償わなければならないのだろうか。

……だが、それが終わろうとも岳は許されないのだろう。
本当の意味を知ってしまったら、そう感じずにはいられなかった。
『償いきるまでは囚われの身』

そんなんじゃないんだ。本当は。
『償いきつても囚われの身』

きつとこれが、事実。償うといっても、人の命を奪うに変わりはないのだから。

……だから多くの悲しみに直面したからといって、それが終われば開放されるなんて、そんな上手い話があるわけないのだ。

岳は——死神となった者はその一生を、罪を償うために費やさなければならぬ。

そう。これが彼らの運命なんだ。

それに岳は、ようやく気付いた。気付いてしまった。

握り込んだ掌に、力が籠った。

前に行く拓也の髪が、はらりと宙を舞う。

それは月明かりを受けて、蒼く輝いていた。

きらり、きらりと。

今二人がいるのは、とある病院の廊下だった。真つ暗で誰もいない。そんな寂しい廊下で、何故だろう。岳は先ほどから胸騒ぎを感じていた。

——嫌な予感がして、たまらないのだ。
頼むから……。

切な願いをその胸に秘めながら。

岳は拓也の後を、ついていった。

「岳。今から言うことをよく聞いてくれ」

「ああ」

拓也は前を向いたまま、歩みを進めている。

岳の胸中に、形容しがたい緊張が渦を巻いていた。

「これはお前の初任務となるわけだ。……だから、その全てをお前がやらなければならない。それだけは承知しておいてくれ」

しゅらんと涼しい音が、徐々にテンポを遅めていく。

そして拓也はある一室の前で、止まった。

岳の身体は、びくんと大きく震えてしまう。

「一番大切な者の、命を奪え」

拓也の冷たい声が、無情にも響き渡っていく。

……そこは、

「お前の担当者は——いずみかわゆり 泉川柚莉だ」

開け放たれた扉の向こう。

夜闇が支配するその奥には、大きなベッドが一つある。

そこに寝ているのは紛れもなく泉川柚莉本人で。

岳はその場で微動だにしない。

ただその光景を見つめるばかりで……。

長い影が伸びる中。

何かが崩れる儚い音が、聞こえた気がした。

七章 (3)

「……や、だ……」

青ざめた唇が、微かに動いた。

大きく見開かれた目は正面を向いたまま。

震える声が、空気を揺らした。

「殺す、って……。何で、だよ……」

蘇るは、楽しかったあの日々。

幸せだった、あの時間。

「俺が柚莉ゆりを、殺すって……。そんなこと、できるわけ……」

風が流れ、ひゅうと甲高い音が耳元で聞こえる。

「……岳たけ」

伸ばされた手。

「だってそうだろ。何で、何で……ッ！」

荒くなる口調。

脳裏に浮かぶは、彼女の笑顔。

鎖がしゃらんと音をあげる。

握る拳には一層の力が入った。

「……何で、好きな子を殺さなきゃいけないんだよッ……」

瞬間、岳はハッとした。

突発的だったけど。

言って、初めて解った。

そう。岳は柚莉のことが好きだったのだ。

あの楽しさも、奇妙な気分も。

全部が全部——柚莉への想いそのものだったのだ。

今更気付いても遅いかもしれない。

けど岳は柚莉のことが、確かに好きだったのだ。愛していたのだ。

「俺は……俺は柚莉のことが好きなんだよ。初めて好きになった子

だっただよ！ それなのに、何で柚莉を殺さなきゃいけないんだ！」

岳の言葉は、夜闇に響いた。

拓也は岳を見て、酷く痛む胸をギュツと押さえて。

「それとも何だ！ 俺が墮天使だったからなのかよ！？ 俺が前世で悪事働いて。だから柚莉を殺さなきゃいけないのかッ？」

それは悲痛な叫びだった。

今にも岳の身体は崩れ落ちそうで。

「柚莉の命使って、罪を償えって言っのかよ……」

寂しさに満ちる病室の中、岳は己の運命を呪い、慨嘆した。

「ああ、そうだよ。お前は一番大切な人の命を奪って、その苦しみを知らなきゃいけないんだよ」

しかし拓也から告げられたのは、否定の言葉などではなかった。

胸を押さえている拓也の手は、荒いだ声と共に震えていて。

「お前は前世とはいえ、多くの命を奪ったんだよ。いろんな人の大切な命、いっぱいいっぱい奪ったんだよ。解るか？ それが何を生んだのか。残された人たちが何を感じたのか。お前には解るかかって言っただよ、岳ッ！！」

最後のほうはもう、ほとんど叫びに近かった。張り上げた声量は院内で木霊し、それはまるで全ての不安をさらけ出したかのようである。

拓也の黒髪から覗く双眸は、憤りと悲しみとで揺れていた。

「解らねえよ。んなこと解るわけねえだろッ！！」

岳もまた、その声を荒くした。

それもそのはずだ。岳は未だかつて、誰の死とも直面したことがないのだ。勿論一人取り残されたことさえもない。

それなのにそんな途方もないことが、解るはずもなかった。

……だが何よりも解らないのは、拓也の言動そのものだった。柚莉を殺せて言っ、最終的には勝手にキレて。何を考えているんだ、拓也は。

岳はギツと奥歯を噛み締めた。

「ああ、そうだろうな。お前に解るわけねえよな」

拓也は岳の言葉に、まったくの否もせず頷いた。

まるで、嘲るかのごとき調子で淡々と。

「大切な人を失った悲しみが、お前なんかには解るわけがねえんだよ」

「——ッ、ふざけんなッ！」

すると突然、ドンッ。と鈍い音が空気を震わせた。

見れば岳は拓也の胸倉を掴み、……そして乱暴に拓也の身体を固い壁に押し当てている。

く……ッと拓也は、小さく息を漏らした。

「ああそうだよ。俺は大切な人なんて失ったこともないし、そんな悲しみだって全然知らねえよ！ お前の言っていることは何一つ間違っちゃいない。けど、お前に一体何か解るって言うんだ！ お前だって、本当は何も解らねえくせに」

瞳孔を開き気味に、岳は拓也に食って掛かった。

全てを失いたくなかったから。柚莉を助けたかったから。……そういうえば、聞こえはいいのかもしれない。が、本当のところ、岳は柚莉と離れたくなかったのだ。これまでの時間を壊したくはなかったのだ。そう、ただそれだけ。

汚い奴だと蔑まされてもかまわない。けれどこの大切な人を殺めたくなんてないんだ。

そして、そんな二人を知らない拓也に、この気持ち解ってたまるかと思つて。

「……解つてるよ」

しかし拓也は、あっさりと首を縦に振っている。

どこまでも落ち着いた——そして悲しそうな声色が、耳元で囁いた。

「うそ言つてんじゃ、ねえよ」

詰まる声を吐き出し、解るわけがないと岳はかぶりを振った。

そんなことがあるわけないと強く心に言い聞かせた。ただ躍起に

なつて。

「俺には解る」

けれど拓也のまっすぐな視線が、岳を捕らえた。

岳はたじろぎ、そして咄嗟に口を開く。

「うそだッ。お前にこそ解るわけ——」

「うそじゃねえよ。お前こそ俺のこと何も知らねえで、んな解りきつたようなこと言つなよッ!!」

すると突如拓也は岳の言葉を遮り、怒鳴りつけてきたのだ。

憤激したらもう、止まるはずもない。

拓也は岳の身体をおもいつき突き飛ばしていた。

あまりにもことが早すぎて、岳の頭は何も考えられなくなっていた。

「俺だつて本当は人間だつたんだよ。家族がいて友達がいた、普通の人間だつたんだよッ！それなのに死神だなんだつて言われて、勝手に死神にされて……大切な家族を殺せつて言われて。禁忌犯して守つたら、大切なものの全部失つたんだよ！家族も友達も、それどころか俺は人間でさえなくなつてたんだ。俺がいたつていう証も記憶も、もう何も残つちやいないんだ!!」

俯きながら、拓也は一気に言葉を吐き出していった。

悲しみに溢れた拓也の声が、直接心に突き刺さってくる。

開いた微妙な距離。

岳は息を呑んだ。

呼吸がまともにできなくなつて、苦しかった。

だがそれよりも、何よりも——

「大切なものの全部失つた気持ちがお前に解るもんかッ！まだなつてもいねえのに、テメエ一人で憐憫ぶつてんじゃねえよッ!!」

——心が何よりも、苦しかった。

確かに拓也のことなんて何も知らないさ。長い時間を共にしたわけじゃないさ。

それなのに、痛い心がさらに痛くなつて……。

雫が一つ、岳の頬を伝っていった。

それは止まることを知らなくて。

一つ、また一つと。数を連ねては溢れ出していった。

嗚咽が一つ、空気を振るわせる。

俺、なんてことを拓也に……。

取り返しのつかないことをしてしまった。

拓也だって馬鹿げた前世の被害者だったのに。

それなのに俺は、その傷口を抉るようなことをして――。

岳は己の愚かさに俯いた。

拓也は何も言えなかった。

ただ開いた距離にある気まずさを埋めるようにして、空いた手をさし伸ばして。

一歩近づく靴擦れの音。

「悪かった。ごめん」

確かに言い過ぎた、と。

温かな掌が、岳の肩を小さく叩いた。

岳は嗚咽を嚙み殺す。

（何でそんなに、優しいんだよ）

伝う雫が、宙を舞う。

儚い音をたてて、それは足元で儚く壊れた。

雫は無数の欠片を、辺りにまき散らす。

輝く、その破片を。

岳はその場に、崩れ落ちた。

鈍く光る大鎌は竦った音をたてて傾き、拓也の手は、虚しくも離れていった。

さわさわと穏やかな、囁き声。

木の葉ももうその身を風にゆだね、眠っている。

窓から見える夜空は、どこまでも平穏そのもので。

それがとても腹立たしくて。

苦しいほどに、遣る瀬無くて……。

時計は動き、小さな声で時の動きを知らせていた。
柚莉はやっぱり、穏やかな表情のまま、眠っていた。

「……岳。そろそろ時間だ」

硬質な音が、室内に響き渡る。

背後で拓也が、かすれかけた声で、そう告げた。

彼は一步一步、確実に近づいていて。

岳の隣まで来ると、沈む表情をその顔に浮かべた。

「……ちくしょう………っ！」

岳は小さく、でも何よりも大きな罪悪感を抱きながら。
自分に対して、そう呟いた。

ちくしょう、ちくしょう……と。

大きな雫は止め処ない。

溢れては零れ、零れては壊れて――

何でこんなに無力なんだ。

何でこんなに愚かなんだ。

打ちひしがれるは己に対してか、それとも……。

握り込んだ拳は、痛みさえもうない。

遠く広がる外界の音が、何故か一際大きく聞こえた。

「………たける、くん………？」

髪がさらさらと、小さな音をたてて流れる。

上げた視線の向こう。

蒼く照らす月明かりが、窓の外でゆらりと揺れた。

「……岳くん、なの………？」

柚莉の小さな声音。

「ゆ――……ッ！」

駆け出したい衝動を、叫びたい衝動を。

中途半端に上げた腰。

その胸に湧き上がらせながらも、岳は出してしまいたい一步を踏

み留めた。

空しく響く、呼びかけた声。

『柚莉』と呼びたい、いとおしい名前。

でも岳は、そのたったの一言が、言えなかった。

だって今は――

噛み締めた唇。

隣で拓也が悲痛な面持ちで、立っていた。

柚莉の影が、僅かに揺れた。

「岳。……行ってやれよ。彼女の所へ」

拓也はぼんと、岳の背を押した。

その力は弱いものだったはずなのに。

何故かとても強く押されたかのように思えた。

心にぐつと来る、何か。

鎖がしやらんと、音をたてる。

眼前にある柚莉の表情が、闇の中で確かに見えた。

でも俺はそれを――

岳は押され踏み出した足に、力を入れた。

ふやけた足は棒が入ったかのような力を持ち、キュツという音が

床から漏れた。

「……ッ。でも――」

「いいよ。行ってやれ」

岳の言葉を遮って、拓也は強い口調でそう言った。

でも、殺さなきゃいけないのに、何でそんな……。

耐えられなかった。岳にとって柚莉の前にいることが。何よりも

耐えがたいことだったのだ。

だって今は、いつもとは違う。

柚莉と談話をするために、ここにいるんじゃない。

柚莉の命を奪うために、ここに来ているんだ。

それなのに、何で？

どんな顔を向けて、柚莉と向かい合えばいいんだ――

岳の背後では、あの揺らめく大鎌が、鈍色の不吉な光を発している。

視線を拓也に向けても、拓也は何も返してはくれなかった。胸の奥が、ずんと重くなる。

拓也はもう一度、岳の背を押した。

まるでこれが最後だとも言つように。

力を込めて。一気に……。

上体は押されるがままに、後方へと反りかえった。

岳は転びかけながらも柚莉の前まで赴き。

「……………」

ひたと止まる足音。

ベッドに横たわる柚莉は、何故だろう。

いつもよりも一層、容態が悪いように感じられた。

そして。

柚莉はこんな岳を前にしても微笑んでいて。

ごめんね、起こしてくれる？ と、か細い声で言ったのだった。

岳は無理をしてその顔に笑みを作り、ああ。と小さな声で答えた。

岳は柚莉に一步近づき。そして覆いかぶさるようにして、柚莉をその腕に優しく抱きかかえて……。

でもその身体は、思っていた以上に細く、そして軽かった。

もう、華奢なんて言葉じゃ言い表せないほどに、痩せ細っていて。痛々しいほどに、軽くって。

初めてその腕に包み込んだ柚莉は、本当に病人なんだなって思った。と同時に、だから、殺すのかって。そうも、思った。

胸の奥は、握り潰されたかのように、解放されない痛みを発している。

感じるのは膨れ上がる一方の罪悪感と、……抑えられない後悔だった。

岳の視界は、再び霞がかって。駄目だ駄目だと唇を引き結び、零れ落ちそうになる涙を必死に押さえ込んだ。今泣いたら、柚莉を困

らせるだけだ。

軽い柚莉を岳は抱え起こす。すると、柚莉はいつものようにベッドに腰掛けながら笑っていた。嬉しいような状況じゃないのに、柚莉は岳を見てずつとずつと微笑み続けている。

足をぶらぶらと揺らしては、柚莉の髪がさらりと揺れた。

ねえ岳くんと、柚莉は言う。

「……来てくれて、ありがとうね」

しかし続いたのは、突拍子もない言葉で。岳どころか後方で拓也までもが驚き、そしてその心を痛めていた。

柚莉だって、解っているはずなのだ。自らが置かれている状況を。そして、これからだらなければならぬ、運命を……。

岳は今までにない痛みを、全身で感じていた。

そして柚莉を、直視できなくなってしまう。思わず視線を柚莉から外した。

星が外でちろちろと瞬いている。

病室は、痛いくらいの静寂に飲み込まれていた。外界の音がやけに大きく、そしてより鮮明に聞こえてきた。

感じる柚莉の存在は、いつもよりもずっと近くに思えて——けれどそれが、どうにも寂しく感じてしまうのだ。

拓也は、そんな二人の姿を、ただ無言のままに見つめていた。蒼い夜闇に溶け入るような二人の姿は、あまりにも幻想的で。それはまるで別世界の出来事のようなだった。

……いや、そうなのだ。本当は。

拓也にとって、岳も柚莉も今や別世界の人だった。決して踏み入ることの許されない。そういうモノが二人との空間にはあったのだ。確かに。

それに拓也は、真実を既に知っていた。

彼女は、もう――

「それと……ごめんね」

死神たちが消沈する中、柚莉の声が大きく響いた。

その声は怯え、震えていて。

「さつき岳くんたちが話しているの、……聞いちゃったんだ」
ごめんね。

柚莉は小さな声で、最後にそう付け加えた。

「え……」

小さく漏れる、抜けた声。

初めこそその言葉の意味することが、まるで理解できなくて。

しかし気付いてからはとても早く、岳は言葉にならない羞恥心に
駆られた。

聞かれてしまったんだ。柚莉に。

殺めなきゃいけないということも、好きだということも。全て——
こんな姿の時に、こんな状況の時に。とんでもないことを聞かれ
てしまった。

勿論柚莉だつてもう、解っているはずだ。自分たちが死神だとい
うことも。全て解っているはずなんだ。

それなのにこれから起こることも、そしてずっと秘めていた心の
内も、全て聞かれてしまったたなんて——。

終わつたと思った。絶対認めてなんかもらえないと、岳は絶望し
た。

夜闇なんかよりももっと暗い後悔の念が、岳の首を絞めてくる。

本当に、ごめんね。

柚莉はもう一度、小さな声で謝った。

でもそれは、一体何に対して——？

暗いままの病室。

寸刻前よりもさらに色を増した静寂が、ここにはいた。

外で、車の走り抜ける音が、小さく通り過ぎていく。

砂が指の間を滑りぬけていくような微かな音と共に、俯く柚莉の
髪は顔を覆い隠した。滑り降りるその髪は、まるで生糸のように細
やかな光を発していた。

悶々とする心中。無尽の罪悪感が岳に押し寄せてきて。

どうのしようもない気持ちに、岳はこの場から身を引こうとした。……だが、ひらりと翻ったローブの袖が、何故か引つ張られているように重くなっている。振り返ってみると、そこには漆黒の布端をはしと掴んだ、小さな手が一つ。

岳は恐る恐る、その手のあるほうへと視線でたどっていった。

するとそこには、冬の湖面のごとく澄み渡った双眸。柚莉の瞳と、視線が合ってしまったのだ。

「ゆ……—」

ハッとして、出かけた言葉は中途に途切れ。それはそのまま、柚莉の瞳に吸い込まれてしまうよう。

続きの見つからない言の葉。岳は驚きにその目を見開き——そして、何故か底知れぬ恐怖を、柚莉の瞳に抱いてしまっていた。

何てことのない、普段と何一つとして変わらない瞳なのに。

その澄んだ双眸に、全てを見透かされているような気がしたのだ。暗城の時と同じように、こちらからは柚莉の瞳を通して、けれど何も窺い知ることができなくて。

柚莉が一体自分のことをどう思っているのだろうか。そう考えるだけで、ゾツとした。

絶対に許してなどもらえない。こんな自分を許してもらえないはずがない。

妙な確信と共に、それだけが岳の恐怖を煽り立てていた。

柚莉の瞳が、微かに揺れる。

岳の心臓はキュツと縮こまった。

「岳くん」

開かれた柚莉の唇。

「行かないで……」

そこから紡がれた言葉は、とてもとてもか細くて……。蒼く淡い月明かりの中、親と逸れた幼子のごとき瞳を、柚莉は岳に向けていた。

ローブの袖を掴む柚莉の手に、一層の力が込められる。

岳は思わず、その目から視線を逸らしてしまつて。……心が一つ、悲鳴をあげた。

本当は、このまま柚莉の所にい続けたかった。たとえ許してもらえなくてもいいから、今だけは柚莉の言葉に甘えて。それで……。隠しきれない本心。揺らぐ意思。

駄目だと解っているのに、こんなにも柚莉と共にありたいと感じてしまう。今、この瞬間でさえも。変わることなく。

しかしそれを、岳は躊躇った。

本当に自分は、柚莉に近づいてもいいような権利があるのだろうか？ と。そう感じずにもいられなかったのだ。

自分みたいな穢れた存在が、他人の命を奪うような存在が。純粋な柚莉に近づける権利があるのだろうか、と。

重くのしかかる罪の意識が、岳の心を絞り上げた。胸の奥はキリリと痛みを知らせてくる。

岳は唇を強く噛み締めた。鉄くさい味が、口内いっぱいに広がつて。

苦しかった。この運命を背負っていくことが、この上なく苦しかった。

そして、今この瞬間が、何よりも……。

岳は瞼をぎゅっと瞑る。

だが潰される心の中でも、断ずるものが一つだけあった。

それはほんの僅かな希望だったけれども。

——柚莉を殺してなるものか。

七章 (4)

俯き、それでも強く袖を掴む柚莉の手は、小刻みに震えていた。色の白い手は見目でも解るほどに、余計に白くなっている。

こんなに近くににいるのに、表情さえ解らなかったけれど。柚莉は袖をぎゅっと強く、その袖を握っていてくれて。

岳たけの考えは、寸分も変わらなかった。

今まさにやろうとしていることは、きっと死神の掟破りなことなのだろう。

でもそんなことなど、どうだっていい。掟を破ろうが何をしようが、岳は柚莉を助けたかった。守りたかった。たとえ拓也たくやのようになろうとも。

だから岳は柚莉の手を、掴まれているとは反対の手で、そっと包み込んだ。その小さな手は夜の空気に曝されて、冷たくなっている。罪の意識が、チクリと痛みを発した。

顔を上げた柚莉は、信じられないものを見るような視線を、岳に向けていて。その瞳は微かに涙ぐんでいて。

月明かりに一つ輝くと、雫は流れ星のように頬を伝っていった。か弱い嗚咽が空気を揺らす。

するとローブの袖を掴む柚莉の手から、しだいに力が抜け落ちていった。袖は徐々に徐々にと柚莉の手から開放されていった……。

滑り落ちる指先。するりと柚莉は、それを手放した。そして岳の手が支えをなくした柚莉の手を掴み、支えていた。

岳の首に下がっていた鎖が、しゃんと澄んだ大きな音をたてる。柚莉の小さな手はローブを放してもなお震えたままだった。

「……柚莉……」

岳は柚莉の双眸を覗き込んだ。……と。

柚莉の瞳には何かが宿ったように、確かに思えて。降り続ける沈黙は雪のよう。

しんと音を消し、山のように降り積もつて。——きつかけがなければ、それが溶けることはない。

二つの影は、決して動く気配を見せず。

互いを見合うが、一切の不穏も持ちえていない。

雪降らず暗雲はどこか彼方へと消え。

誰とも知らぬ鼓動が、一つ脈打った。

きつかけは——生じた。

「あのね、本当に嬉しかったんだよ。岳くんがその……『好き』つて、言ってくれて」

柚莉は頬を染めて言いながらも、その視線は決して逸らされることなく。前にある岳の瞳を、ずっと見ていた。

「えっ……」

とんでもない告白に岳も柚莉から目が離せなくなつた。
今、なんて？

頬に紅を浮かべながら、岳は困惑を見え隠れさせた。

響く声は戸惑つてもなお、どこか甘く。

「私だけかと、思ってたんだ。……友達を好きになっちゃったの、私だけかと」

照らす月明かりが、発した気持ちが。全て柚莉の瞳に入り混じつていて。

岳はそれを、言葉なしに見つめていた。

「普通じゃないよねって、変だよなって。ずっとずっと思っていたの。このまま幸せでいたかったから、絶対に言っちゃいけないって。そう思ってたの。なのに——」

柚莉の言葉は音となり、空気を揺らしては岳の元へと届けられた。
少し俯いた柚莉はどこか悲しげに微笑んでいて。

風が外を通り抜け、窓が僅かに揺れている。

開け放たれた白いカーテンも、今や夜闇のダークブルーに染め上げられていた。

岳の手を、柚莉は震える手で最大限の力をもって、握り返してく

る。

そして柚莉の影が、少し動いて。

「でも、両想いだったんだね」

そう言つと、柚莉は今までの悲しさなんてなかったと言わんばかりに、その顔をおもいきりほころばせたのだ。

それはまるで、荒野に咲く一輪花のようで……。

「私も岳くんのこと、好きだよ」

ふられると思つていた。拒絶されると思つていた。

なのに柚莉が言つたのは、まったく違う言葉だった。

闇が明るく照らされる。

彼女が言ってくれた、魔法の言葉。

心臓の辺りが溶けるように温かくつて、温かくつて。

耳は未だに心地良い。

『両想いだったんだね』

岳は堪らずに、微笑み返していた。

ああ、そうだよ。本当は二人して同じ気持ちを抱いていたんだ。

岳は怖くて怖くて。恋しているというこの気持ちと、向き合えなかったただけなんだ。

きつと言つたら変だとか、そんな気持ちを抱くのはおかしいとか。柚莉と同じで、そんなことを思つて。

だから岳はそれを心の中に押し込めた。告白なんて大層なことなどできないからと、気付かないふりをしていただけなんだろう。きつと。

けれど今、その想いは二人をつなぐ架け橋となったのだ。初めて解つたと、そう思っていたこの気持ちはどんなものでも壊せない繋がりを得て。

岳は思わず柚莉の手から己の手を放して。

……そしてその両手で、柚莉をギュツと抱き寄せていた。

柚莉は少し驚いたようだ。でもそれは、最初だけで。

二人は互いの存在を確かめあうようにしばらく動くこともなく、

ギュツと大切なものを感じあっていた。

静寂が二人を祝福する。

腕の中で、柚莉は確かに温かった。

小さくても細くても。それでも柚莉は温かくて。

——互いの鼓動は、同時にトクンと音をたてた。

二人は確かに、この瞬間を生きているのだ。共に歩んでいるのだ。

「柚莉、ごめんな」

岳は小さく謝った。

気持ちと向き合えなかったことを、隠していたことを。

抱きしめる腕に、言葉を込めて。

柚莉はおどおどしながらも、岳の背にそつと両腕を回した。

その動作は初々しすぎて。でも——今の二人にはぴったりすぎるほど、似合っていた。

そして、いいよと言ってもらえたような、そんな気もした。

「俺、本当に柚莉のこと大好きだから」

「うん」

「誰よりも愛してるから」

「うん」

「絶対、助けてやるから」

「うん」

言葉になんてしちやいけない。

想う気持ちよりも陳腐になつてしまふ。

……解つていても、岳は柚莉に想いを伝え続けた。

そのたびに柚莉は頷いてくれて。

笑顔が信じてくれている、何よりの証だった。

星が一層の輝きを求め、天に瞬く。

そして——……

時間も空気も。

この世の全てが、動きを止めた。
今まで以上に互いを感じていて。

触れ合った唇は、微かに震えていて。

それが二人の緊張をさらに煽っていて……。

けれど心臓だけは、いつも以上に鼓動を早く打っていた。

二人はきゅっと、その腕に力を込めた。

それはひどく、ぎこちなくて恥ずかしいキスだった。

でも、

『好きだから』

その言葉を、しかと伝えられたはず。

外で星の輝きが増した。

二人は互いの唇を離した。

ぎこちないキスの後に残ったのは、嬉しい緊張で。

岳は柚莉を直視できないから。

さらに柚莉を抱き寄せ、トンと柚莉の肩に額をつけた。

未だに二人の鼓動は全速力で。

柚莉もトンと、岳の胸に額を当てた。

二人はずっと、緊張しっぱなしだった。

どれほどの時間が過ぎたのかなんて、そんなことは解らなかった。
ただ長い間、二人はこうして抱き合っていた。

互いの髪が入り乱れるのも構わずに。

ずっと、ずっと――

拓也はそれを、終始見ていた。

しかしそこに浮かぶのは、気恥ずかしさなどではない。

せめて今は、このままで……。

そう言いたげな沈痛な面持ちで、二人を見守り続けていた。

だがそれも、じきに消え去るのだろう。

全てに永遠がないのと同じように、この状況にも永遠などはないのだ。

それは物事の道理であり、同時に必然でもある。

だから、今だけは……。

拓也の視線のその先で。

二人の愛の契りは、消えかけようとしていた。

星の瞬きが位置をずらしかけた頃。

互いの緊張は、徐々にだが薄れ始めてきた。

岳は僅かに額を離すと、いとおしい柚莉に視線を向けて。

自らの胸に額を当てている彼女を見て、やっぱり少し緊張した。

頬が少し、熱くなる。

その顔に微笑みを浮かべながら、視線を落そうとして。

——小さな変化に、岳は目を見張った。

「な……ッ」

顔面は最早、蒼白も同然。

見れば柚莉の身体が、淡い光を纏っているではないか！

岳の心は幸せから、一気に暗闇へと突き落とされたのだった。

何で、こんなことに……？

岳は混乱し焦った。

そして、

『お前の担当者は——いずみかわ 泉川柚莉だ』

拓也から言われた言葉が、脳裏をよぎる。

まさか——ッ！！

だが岳はそれに対し、強く横に首を振った。

そんなことあるわけないと。

そんなことがあってたまるか、と……。

しかしそんな岳の期待とは相反して、その光はさらなる明るさを帯びていて。

と。柚莉の身体から淡く、そして雪のように柔らかで丸い光が、ふわりふわりと浮き出てきたのだった。

すると途端に、柚莉の身体からは、全ての力が抜け落ちてしまう。

岳は柚莉の身体を、両手でしかと抱きかかえた。

その間にも、光はさらに上へと浮いていく。まるで、白い羽のよう
うに。

病室の蒼闇は、淡い白光に飲み込まれていく。

岳はその根源を目で追った。

これが、人間の魂魄なのか――？

実感なんて、そんなもの湧かなかった。

今まで見たこともない神秘的な光景に、目は釘付けで。

ただ、これを引き止めなければ柚莉が帰ってこないような気がした。
た。

直感だったかもしれない。でもそんな気がしてならなくて。

岳は柚莉の身体を抱えながら、必死になって片手を伸ばした。

指の先まで、神経を張り詰めて。

あと少しをとどかせたくて。

……だが、魂魄はことごとく、岳の指の間をすり抜けていつてしま
う。

とどきそうで、ちっとも触れることさえできなくて。

（ダメだ！ そうじゃないと柚莉は――！！）

指先が、震えている。

焦れば焦るほどに、魂魄は岳の指から遠ざかっていった。

どんなに足掻いても決して掴み取れなくて。

掠ることさえ、できなくなつて。

震える足。

浮き上がった踵。

耳の横にある手は天を向き。

岳はぐつと、その手を伸ばした。

（とどけ――ッ――！）

淡い光は闇を照らす。

浮き泳ぐ魂魄は、岳の手のすぐ近くにあった。

――いける！ 絶対に。

ぎゅっと瞼を閉じ、全身の力を振り絞って。

岳はその手を握った。

そして。

——岳の手は、空を掻いた。

魂魄はするりと、岳の手中を逃れていたのだ。

室内はより鮮明に照らされ続ける。

ふわりふわりと魂魄は、さらに上へと目指していった。

……天井にぶつかる寸前で、儚くも霧散した。

風に吹かれ、消えていく砂のように。

さらさらと。

さらさらと。

その光を散らしていった。

蒼く淡い光が、闇に消えていく。

全てが消えるその前に。

『ありがとう』

と、柚莉の声が聞こえたような気がした。

岳はその場に立ち尽くした。

空っぽになった柚莉を、その腕に抱きながら。

主のいなくなった、この部屋で。

「柚莉イイイイイ——！！」

何でもっと早く、想いに気付けなかったんだろう。

何でもっと早く、告白できなかったんだろう。

結局、何一つ柚莉にしてあげられなくて。

約束だって、守ってやれなくて。

何で……。

岳はその場に、膝から崩れ落ちた。

柚莉の残された身体と、共に。

闇は今、全てを飲み込んだ。

膝は鈍い痛みを発し、それを岳に伝えてくる。

近づく足音。

拓也が岳の肩に、そつと手を乗せた。

その手は痛いほどに温かくつて。

「歌ってあげよう。柚莉ちゃんのために」

胸はこれ以上苦しくなることはないのだろう。

最大級の悲しみが罪悪感が、岳の心に押し寄せてきている。

息の仕方なんて忘れてしまっうほどに。

涙の止め方が解らなくなるほどに。

岳は柚莉の身体をぎゅつと抱きしめた。

その身体はもう生きていないのに、まだ温かくて。

大きな嗚咽が、一つ漏れる。

岳は天を仰いだ。

……そして、

美しい歌声が、夜闇を揺らした。

悲しい死神の、一つの詩が。^{うた}

今ここに。

——ごめん、柚莉——

ごめんね。守ってあげられなくて、本当に、ごめんね。

一番好きになっちゃって、本当に、ごめんね……

涙がぽつりと、柚莉の頬に落ちた。

それは透明な筋を引いていって——まるで柚莉が、泣いているかのようだった。

歌声はやむことなく、夜の世界を震わせる。

岳の頬に、涙が伝った。

章幕 暗闇の中で

「ごくろつさま」

「……………ども」

「思わぬハプニングに巻き込まれたね、拓也^{たくや}」

^{あんじょう}暗城は人形のような微笑を浮かべながら、そう言ってくる。決まり文句のように大変だったねえーとか言ってはいたが、まったく表情と口調が合っていない。

拓也は暗城を一瞥してから思わず、あの時のこと思い出してしまった。

柚莉が目覚めた、あの時を……。

そう。あの瞬間から柚莉の死は決まっていたのだ。

というのも、死者となるものは本来目覚めるわけがないのだ。そのまま眠りについていて、そこをあの鎌で身体と魂魄とを分離するのである。……そう、本来ならば。

しかし時たま、例外というものがある。それが柚莉のように、死する寸前で目覚めてしまうようなタイプだ。

元より目覚めるはずのない死者が目覚めるということは、本来ありえないことである。それに死者が目覚めるのには、相当の霊力が必要となってくるのだ。

じゃあそれをどこから摂取するのかといえば——自らの魂魄である。

例外者はつまり、自らの命を削って目覚めを維持するのだ。勿論人の持つ霊力にも限りがあるから、それが尽きれば自ずと死ぬ。

死者となるものは、魂魄の残量が元から少ない。そんな死者が目覚めるのだから、その時点でその者の死は放っておいても、確定したも同然なのだ。

……………だが。

「ん、どうしたの拓也？ 機嫌が悪いみたいだけど」

今回ばかりは、それも例外。

「当たり前です」

拓也は不機嫌の象徴とも言える低い声のまま、暗城から視線を反らした。

気付いてか、暗城は困ったように微笑むと拓也に近づいていく。

「……もう解っていたんじゃないの？ これの意味」

聞こえる声は飽く迄も冷静そのもので、妙に腹立たしい。

拓也は暗城を、おもいきり睨みつけた。

長いダークブルーの髪が、小さな音をたてて揺れた。

「解っているとかいないとか、そういう問題じゃありません！ こんなこと、酷すぎます。最初の任務が、『一番大切な人の魂魄を捕ること』だなんて！」

「でも、ちゃんとその人だけは元に戻してあげてるでしょ」

そう、戻してくれるのだ。確かに初任務時に狩った魂だけは、元に戻してくれる。

それは死神の一番、大切な者の魂魄だから。

最初ばかりは、己の罪の大きさを思い知るために大切な者の魂魄を捕る。

ある種の、戒めなのだ。

しかし拓也は、それがどうにも許せなかった。

「そういう人の命を弄んでいるようなところが、俺は気に入らないんです」

大切に思っていた人は、これじゃあ単なる巻き添えもいい所だ。

無駄な死を一つ多く迎えるだけの、さらなる被害者にしかならない。

そして死神も戒めとはいえ、心に大きな傷を負うだけだ。

それ以外の、何ものでもない。

きつぱりと叫んだ拓也の声は、冥界の中へと消え入っていく。

今の今まで拓也が怒鳴ったことなどなかったものだから、暗城は意外とでも言いたげに半ば呆けた表情で拓也を一つ見つめてしまっ

た。

荒い拓也の呼吸音。拓也の肩が激しく上下に揺れていて。

「もしかして、拓也は自分の時でも思い出しちゃったのかな？」

拓也は唇を噛み締める。

すると暗城は、クスリと笑った。

「確かにあれは、辛かったよねえー。知らなかったとはいえ禁忌まで犯して……。助けたはいいけど、自分は純粋な死神になっちゃったんだもんね」

その声は楽しんでいるかのように弾んでいる。

くつと喉を鳴らすと、拓也は微かに俯いた。

「……いいんですよ、自分なんて。妹が助かったんだから、そんなこと」

「君のいた証が、全て消え去ってしまったのに？」

暗城は拓也の顔を覗き込んだ。

いいんですよ、拓也ははつきりと答えた。

「俺が言いたいことは、一つだけなんです」

消え去った過去は拭いきれない。……けど、

「その人の、しかも一番大切な人の命を弄ぶっていうその行為事態が許せない。つまりはそういうことなんですよ」

これからの未来なら変えることだって、きつとできるはず。

こんな辛い思いは、もうする必要などないのだ。

過去が大悪人でも、今は違うんだから。

今は一人の、人間なんだから――。

耳が痛いくらいの静寂が、降り続けている。

拓也はぎゅっと、握る拳に力を込めた。

「……ま。決まりだからね。僕一人の権限で変えることはできないんだよ」

そう言つと、暗城は拓也の肩にぽんと手を乗せた。

「そういうことは、天冥夫^{てんめいふ}みんなが集まって決めないとだ」

各地を治める死神の長。それが天冥夫。

そして暗城もまた、その天冥夫の内の一人なのだ。

彼らが全員集まって、一つのことを決めるだなんて……。とてもじゃないが拓也には想像さえもできなかった。

できなかったが、

「じゃあ暗城さんが提案して、さっさと決めて下さいよ。仮にも天冥夫でしょう？ あなた」

苦し紛れに、やめて下さいと、拓也は肩にある暗城の手を払い除けた。

酷いなー。と、暗城は苦笑しながら呟いて。

「じゃあ、そのうち提案しておくよ。でもその前に、もう一つ仕事があるからね」

にこつと笑う暗城は手中には、淡い光の球が収められている。

拓也はそれを、ぼうつと見ていた。

これが、柚莉のカケラ――。

「さあ、僕は魂魄の再生をするからね。拓也はもう休んでいなさい」
小さい子をあやすように、暗城は拓也の背中を押して。
されるがままに、拓也は押されたほうへと歩いていく。

途中振り返ると、身を翻す暗城の背中が、そこにはあった。

彼の姿は、どこか優しかった。

終章 降り注ぐ陽光と過ぎ去る風

目が覚めると、そこは自室のベッドの上だった。

着ているものも死神装束ではなく、昨晚着ていた制服姿で……。深かった闇は薄明かりを纏い始めている。

もうすぐ、朝が訪れるのだろう。

岳は宙を仰ぐ。

涙は未だ、止まることはなかった。

何もかもが空虚のままに、時間は過ぎ去っていった。

朝食を摂って。

学校へ行って。

部活をして。

授業を受けて。

いつもと何一つとして変わらないのに、岳はに何もかもが空っぽのように思えた。

友人だっているのに。

家族だっているのに。

もう、大切な人はいない。

そう考えるだけで、何もかもが無意味に感じられた。

頭は麻痺してしまったかのように、芯からボーっとする。

涙はもう乾ききってしまったのだろうか。

どれだけ悲しくても。

どれだけ辛くっても。

昨日はあれだけ出たのにもかかわらず、今やその一滴すら出てきやしない。

自分は酷い奴だと思った。

とんでもなく酷い奴だと思った。

大切な人に助けてやると誓ったのに、助けてやることさえできなくって。

拳句の果てには、その大切な人の命を奪って。

仕舞いには涙さえ、流してやれないのだ。

なんて、冷酷非道な奴なんだろう……。

持っているシャーペン、一向に動く気配を見せやしない。

教師が黒板を背に、何かを言っていた。

必死に何か、伝えようとしていた。

けれど頭には何にも入っては来なくって。

ただボーっとことの行方だけを待っていて。

それでも時は、回っていた。

無意味に時間は過ぎ去っていく。

時は昼休みへと入っていた。

今日は教室で食べようと陽太ようたが提案したらしくて。机をくっ付けて、椅子を持ってきて。いつもの見慣れたメンバーでの昼食となっ

た。

勿論、いつもみたいに陽太ははしゃいでいる。

何か色々言ってきて、岳はそれに適当に頷いて。すると何故か、

岳の弁当は急激に色々ゆういちと減っていくのだ。

眼前では勇一ゆういちも綾子あやこも顔色を変えて焦っているようだったが。…

…ただ、それさえも、もうどうでもよかった。

今はこの空気についていく自信さえ、岳にはなかったのだ。

……と。

ポケットに入れておいたケータイが、バイブの微妙な振動を岳に伝えてきたのだ。のっそりとそれを見やれば、メール受信のランプがのんきにぺかぺかと光っている。

岳はそれを、無言で開いた。

するとそれは無題で、しかも見たこともないメールアドレス。
そして、

『屋上に来て』

それしか、書かれてなかった。

岳はそれをしばらくボーっと見てから、無造作にケータイをポケットにしまうと。

「悪い。ちょっと用事あるから、行ってくるわ」
何気ないようにふるまって。

昼食を中断して、のそのそと教室を出ていった。

勿論向かった先は、屋上だった。

別に行かなくてもいいのだ。

もしかしたら悪戯かもしれない。

それを解っているようで、本当は全然解っていないくて。岳は無心に階段を一段、また一段と上っていく。

薄暗い通路の中を、光を求めて。ひたすらに。

そして、岳は屋上へと通ずる扉を開いた。

そこからは春の暖かな陽光が、岳にめいっぱい降り注いできて。爽やかな風が、岳の髪を撫でていった。さらさらと、さらさらと…。

岳はその中を突き進んでいく。だが結局、そこには誰もいなかった。

屋上はまったくの、無人だったのだ。

（ははっ、そうだな。いるわけないよな）

岳は頂垂れてフェンスを掴むと、自嘲気味に笑った。
何を期待していたんだろう。

メールに何を求めていたんだろう。

所詮救われるわけがないのだ。

だって、こんな穢れた死神なんだから。

それなのにさ――

春の風が、岳を包み込む。

指に喰い込むほどに、岳はフェンスを強く掴んだ。

（騙されたんだ。そうさ、俺は騙されたんだ）

嬉しくもないのに、楽しくもないのに。岳はくくつと喉を鳴らした。

笑いながら、岳はフェンスに頭をつけた。カシャンと小さく、フェンスは泣いた。

「馬鹿じゃん、俺……」

岳の声は、春の陽気の中に消えていった。

下方では都市の喧騒が聞こえてきて。

巻き上がる風が、岳の髪を揺らし続けた。

長いようで短い時間、岳はずっとフェンスにもたれかかっていたが、ずっとこうしているわけにもいかず、岳は突き放すようにフェンスを押すと、重たい身体を翻した。

帰ろう。惨めな姿を曝しにさ。

振り返った。元来た道へと、たどってきた道へと。

見慣れた、光景へと。

強い春の風が、眼前を駆け抜けていった。

岳は思わず目を瞑り。

すると桜の香りが、何故かして――

「え……」

薄っすらと開けた、瞼の向こう。

景色がぼやけた、そのまた奥で。

岳は我が目を疑った。

でもそれは、確かに――

「岳くん」

グレーのスカートが、風に靡く。

昇降口の扉の前。

そこに立っていたのは、

「柚莉……」

笑顔のままに、柚莉は駆け寄ってくる。

制服に身を包んだ彼女が、今、岳の元へ。

岳は呆けたまま、その場に立ち尽くしていた。

そんな岳の胸に、柚莉は飛び込んできたのだ。昨日までとはまるで違う、元気なさまで。

そして岳は、柚莉をしつかりと両腕に包み込んだ。

「え、柚莉……？ どうして……」

しかし岳は嬉しい反面、混乱してしまっていた。

それもそのはずだ。だって柚莉は、その魂魄を失ってしまったはずなのだ。

昨夜、守ってあげられなかったのにどうして——？

疑問が脳裏で渦巻き、心が締め付けられる。そんな岳の気持ちに気付いてか、腕の中にいる柚莉は小さく身じろぎ、顔を上げるとエヘへと微笑んできて、

「あのね、神様からの贈り物だよ。きつと」

と、そんな曖昧な答えを口にしたのだ。

勿論この世に、本当に神様がいるのなんて解らない。

けど、柚莉はこの陽光のように温かな笑みを湛えながら、岳の目を見つめていて。

ああ確かに、これは神様からの贈り物だったのかもしれないな。

岳は本当だよと言っている柚莉の瞳を見て、そう確信した。

そう。死をつかさどる、死神様からの——……

桜の香りは途切れることなく、柔らかに駆け巡っていく。

柚莉は岳にその身を預けた。

「私ね、岳くんが死神でも、嫌いになんてならないよ」

胸元で紡がれた小さな言葉。

犯した罪は一生消えないけれど、それでも。

「岳くんは、私のこと嫌い？」

——何だか、救われたような気がした。

救ってくれたのは、自分じゃなくて、柚莉だった。
約束したのとは、逆の展開だったかもしれない。
けれど。いや、だからこそ。

「嫌いなもんか。俺は柚莉のこと、全然嫌いなんかじゃない」
もう一度この気持ちを、伝えたいと思った。

岳は柚莉をその胸に、一層近くまで抱き寄せた。

「俺は柚莉のこと、大好きだから」

すっかり新緑に色を変えた桜の木々が、風に靡く。

空虚だった世界が。

無意味だった時間が。

今、意味なすものへと帰っていく。

柚莉はやっぱり細くて軽くて、華奢なんて言葉じゃ到底表せなかったけど。

だけど確かに、温かかった。

岳は柚莉を見て、その顔に喜びの花を咲かせる。

そう。柚莉は今も、生きているのだ。

「おかえり、柚莉」

もう絶対に、離さないからと。そう言うかのように、ギュッと抱きしめ。

柚莉もその腕を岳の背に回していて。

「岳くん、ただいま」

元気な声は、どこまでも響き続けていく。

二人は互いの顔を見て、満面の笑みをその顔に浮かべた。

笑みを浮かべてはくすくすと小さく声を出して。

世界は生まれて初めて、最高の色彩を放ったのだ。

さあ、これから何をしようか。

一度失ったものを取り戻すために、これからもずっと歩んでいくために。

君と一緒に、いられるために――。

淡い風が二人を撫でていく。

春の陽光は、どこまでもどこまでも暖かった。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6265b/>

裏表の未来予想図

2010年10月8日15時58分発行